

3 調査結果

(1) 事後調査の結果の内容

① 予測した事項

ア. 生物

ア) 陸上動物相の変化の内容及びその程度

(7) 哺乳類

a. 確認状況

現地調査で確認した種は表7-4に示すとおり、4目7科7種であった（詳細は資料編表3-1（資-35ページ）参照）。

評価書及び事後調査の確認状況は、表7-5に示すとおりである。評価書と事後調査を比較すると、確認種に大きな変化はなかった。

表 7-4 哺乳類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	確認時期			
				春季	夏季	秋季	冬季
1	モグラ	モグラ	アズマモグラ	○	○	○	○
2	コウモリ	ヒナコウモリ	ヒナコウモリ科		○		
-		-	コウモリ目		○		
3	ネコ	イヌ	タヌキ	○	○	○	○
4		イタチ	イタチ	○	○	○	○
5		アライグマ	アライグマ			○	
6		ジャコウネコ	ハクビシン		○		
7	ネズミ	ネズミ	アカネズミ	○		○	
計	4 目	7 科	7 種	4 種	5 種	5 種	3 種

注) 種名、科の配列等は、「種の多様性調査（動物分布調査）対象種一覧」（2002年、環境省）に従った。

表 7-5 評価書と事後調査の確認状況（哺乳類）

No.	目名	科名	種名	評価書	H30 年度 事後調査
1	モグラ	モグラ	アズマモグラ	○	○
2	コウモリ	ヒナコウモリ	ヒナコウモリ科		○
-		-	コウモリ目の一種	○	
3	ネコ	イヌ	タヌキ	○	○
4		イタチ	イタチ	○	○
5		アライグマ	アライグマ	○	○
6		ジャコウネコ	ハクビシン		○
7	ネズミ	ネズミ	アカネズミ	○	○
計	4 目	7 科	7 種	6 種	7 種

小型哺乳類のトラップ設置地点の環境概要は、表7-6に示すとおりである。

調査の結果、表7-7に示すとおり、地点2において秋季にアカネズミを2個体、地点3において春季にアカネズミを3個体確認した。

表 7-6 トラップ設置地点の環境概要

地点	設置地点環境概要
1	多摩川河川敷のハリエンジュ等の落葉広葉樹林である。アカメガシワ等の低木もみられ、林床にはイネ科植物等が密生している。日当たりは良く、乾燥した環境である。
2	多摩川の堤防法面下に位置する池沿いの高茎草地である。定期的に草刈りが実施される箇所であるが、ヨシやクズなどの他、所々にヤナギが生育している。日当たりが良いが、池沿いのため比較的湿潤な環境である。
3	浅川の堤防法面下の河川敷草地である。草刈りの影響はなく、クズやアズマネザサが密生し、所々にヤナギが生育している。日当たりは良く、乾燥した環境である。

表 7-7 トラップ法調査結果

確認種	1		2		3		合計
	春季	秋季	春季	秋季	春季	秋季	
アカネズミ				2	3		5
合計	0	0	0	2	3	0	5

注) 数字は個体数を示す。

無人撮影装置設置地点の環境概要は、表7-8に示すとおりである。

調査の結果、表7-9に示すタヌキが全地点で確認された。

表 7-8 無人撮影装置設置地点の環境概要

地点	設置地点環境概要
1	多摩川河川敷のハリエンジュ等の落葉広葉樹林である。アカメガシワ等の低木もみられ、林床にはイネ科植物等が密生している。日当たりは良く、乾燥した環境である。林内には所々に散策道が通っており、獣道となっている。散策道上にカメラを設置。
2	多摩川の堤防法面下に位置する池沿いの高茎草地である。定期的に草刈りが実施される箇所であるが、ヨシやクズなどの他、所々にヤナギが生育している。池の水際にコンクリートブロックが整備されているが、哺乳類の移動障害とはなっておらず、水辺までのアプローチは容易である。コンクリートブロックと高茎草地の境界にカメラを設置。
3	浅川の堤防法面下の河川敷草地である。草刈りの影響はなく、クズやアズマネザサが密生し、所々にヤナギが生育している。春季は河川敷道路沿いにカメラを設置。

表 7-9 無人撮影法調査結果

確認種	1		2		3	
	春季	秋季	春季	秋季	春季	秋季
タヌキ	○	○	○	○	○	○
1 種	1 種	1 種	1 種	1 種	1 種	1 種

b. 注目すべき種

注目すべき種は表7-10に示すとおり、イタチのみであった。

注目すべき種の確認状況は表7-11に、確認位置は図7-8（148ページ）に示すとおりである。

評価書及び事後調査の注目すべき種の確認状況は、表7-12に示すとおりである。

評価書で確認された注目すべき種（イタチ）は事後調査でも同様に確認されている。

表 7-10 哺乳類注目すべき種一覧

目名	科名	種名	春季	夏季	秋季	冬季	選定基準				
							①	②	③	④	⑤
ネコ	イタチ	イタチ	2	2	5	1				NT	
1 目	1 科	1 種								1 種	

注1) 種名、科の配列等は、「種の多様性調査（動物分布調査）対象種一覧」（2002年、環境省）に従った。

注2) 重要種の選定基準は以下のとおりである。

①：「文化財保護法」（昭和25年5月30日、法律第214号）

特天：特別天然記念物、天：天然記念物

②：「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）」（平成4年6月5日、法律第75号）

国内：国内希少野生動植物種

③：「環境省レッドリスト2018の公表について」（平成30年5月、環境省）

EX：絶滅種、EW：野生絶滅、CR+EN：絶滅危惧I類、CR：絶滅危惧II類、EN：絶滅危惧III類、VU：絶滅危惧IV類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、LP：絶滅のおそれのある地域個体群

④：「レッドデータブック東京2013～東京都の保護上重要な野生生物種（本土部）解説版～」

（平成25年、東京都環境保全局自然保護部）の「北多摩地区」

EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR+EN：絶滅危惧I類、CR：絶滅危惧II類、EN：絶滅危惧III類、VU：絶滅危惧IV類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、*：留意種

⑤：「レッドデータブック東京2013～東京都の保護上重要な野生生物種（本土部）解説版～」

（平成25年、東京都環境保全局自然保護部）の「南多摩地区」

EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR+EN：絶滅危惧I類、CR：絶滅危惧II類、EN：絶滅危惧III類、VU：絶滅危惧IV類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、*：留意種

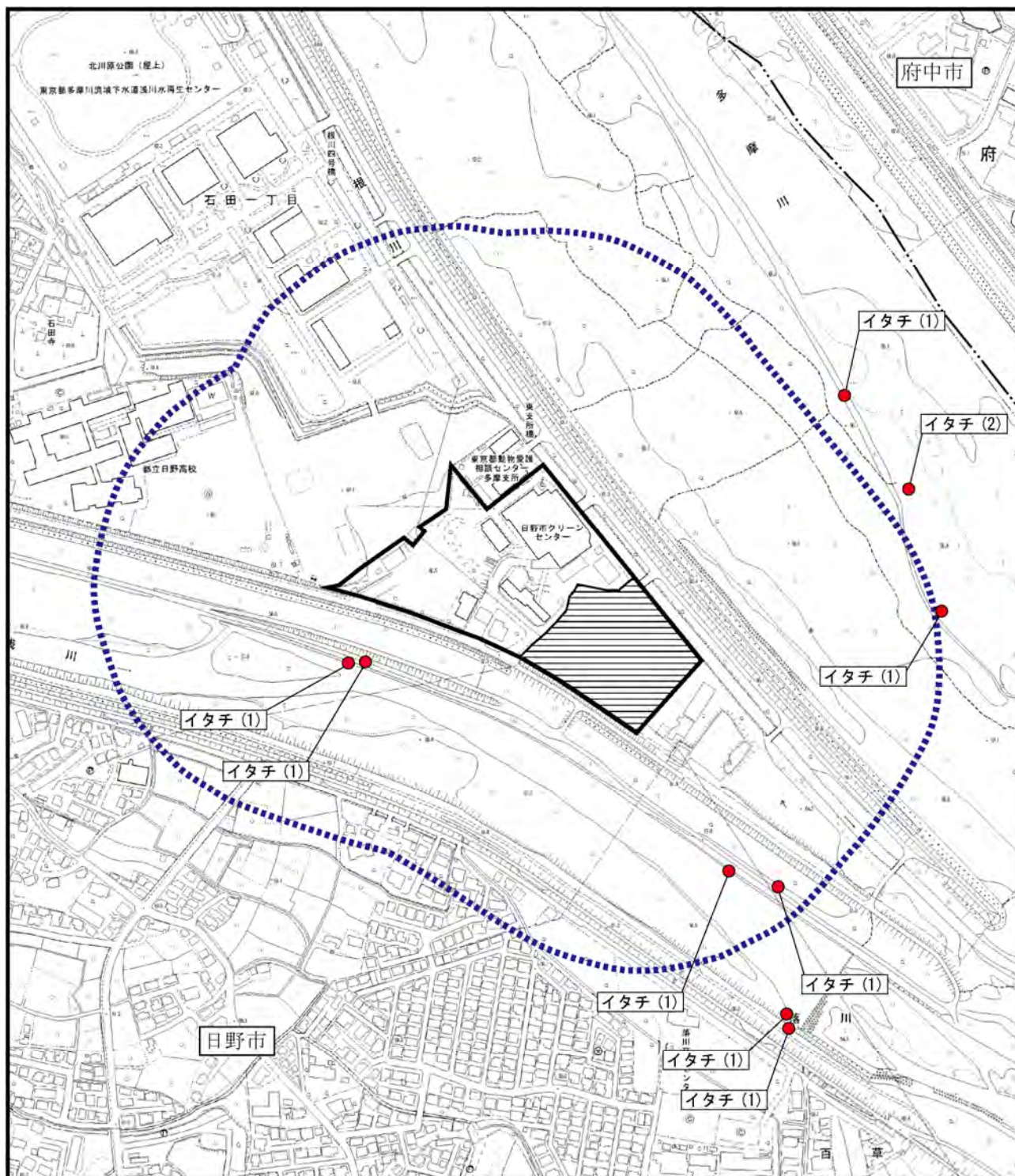
注3) 数字は確認例数を示す。

表 7-11 注目すべき種（哺乳類）の確認状況

種名	確認状況
イタチ	現地調査では、春季に2例、夏季に2例、秋季に5例、冬季に1例を確認した。確認地点は多摩川及び浅川の河川敷で、足跡および糞による確認であった。

表 7-12 評価書と事後調査の確認状況（注目すべき哺乳類）

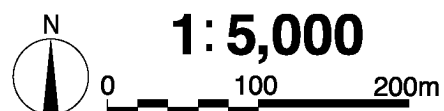
目名	科名	種名	評価書	H30 年度 事後調査
ネコ	イタチ	イタチ	○	○
1 目	1 科	1 種	1 種	1 種



凡 例

- : 対象事業実施区域
- : 建設予定地
- : 市界
- : 調査範囲
- : 注目すべき種確認位置

図 7-8 哺乳類注目すべき種確認地点位置図



この地図は、東京都縮尺1/2500地形図（平成27年度DVD版）を使用したものである。

(イ) 鳥類

a. 確認状況

現地調査で確認した種は表7-13(150ページ)に示すとおり、11目29科51種であった(詳細は資料編表3-2(1)～(2)(資-37～資-39ページ)参照)。

評価書及び事後調査の確認状況は、表7-14(1)～(2)(151～152ページ)に示すとおりである。

評価書で確認された種のうち、事後調査で確認されなかった種は、オナガガモ、カイツブリ、ヒメアマツバメ、コチドリ、イソシギ、ミサゴ、アオゲラ、チョウゲンボウ、コシアカツバメの9種が挙げられる。また、事後調査で新たに確認された種として、オカヨシガモ、マガモ、バン、イカルチドリ、タシギ、クサシギ、キアシシギ、ツミ、オナガ、シメ、オオジュリンの11種が挙げられる。これらの種は特定の環境に強く依存する種ではなく、水辺(陸)、河川、樹林、草地等の環境に広くみられる種であり、鳥類は移動能力が高く行動範囲も広いことから、確認の有無は偶発的なものであったと考えられ、生息環境の変化に起因するものではないと考えられる。

表 7-13 鳥類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	生息環境	渡り区分	確認時期			
						春季	夏季	秋季	冬季
1	キジ	キジ	キジ	草地	留鳥	○			
2			コジュケイ	樹林	留鳥	○	○	○	
3	カモ	カモ	オカヨシガモ	水辺(陸)	冬鳥	○			
4			マガモ	水辺(陸)	冬鳥				○
5			カルガモ	湖沼	留鳥	○	○	○	○
6	ハト	ハト	カワラバト	田園	留鳥	○	○	○	
7			キジバト	樹林	留鳥	○	○	○	○
8	カツオドリ	ウ	カワウ	河川	留鳥	○	○	○	○
9	ペリカン	サギ	アオサギ	河川	留鳥	○	○	○	○
10			ダイサギ	河川	留鳥	○	○	○	○
11			コサギ	河川	留鳥				○
12	ツル	クイナ	バン	水辺(陸)	夏鳥	○		○	
13	チドリ	チドリ	イカルチドリ	河川	留鳥				○
14		シギ	タシギ	水辺(陸)	冬鳥				○
15			クサシギ	水辺(陸)	旅鳥, 冬	○			
16			キアシシギ	水辺(陸)	旅鳥	○			
17	タカ	タカ	トビ	田園	留鳥	○	○	○	○
18			ツミ	樹林	留鳥		○		
19			オオタカ	樹林	留鳥	○		○	
20			ノスリ	樹林、農	冬鳥				○
21	ブッポウソウ	カワセミ	カワセミ	水辺(陸)	留鳥	○		○	○
22	キツツキ	キツツキ	コゲラ	樹林	留鳥	○	○	○	○
23	スズメ	モズ	モズ	田園	留鳥	○		○	○
24		カラス	オナガ	樹林	留鳥	○		○	○
25			ハシボソガラス	田園	留鳥	○	○	○	○
26			ハシブトガラス	田園	留鳥	○		○	○
27		シジュウカラ	シジュウカラ	樹林	留鳥	○	○	○	○
28		ヒバリ	ヒバリ	草地	留鳥	○			
29		ツバメ	ツバメ	家屋	夏鳥	○	○		
30			イワツバメ	家屋	夏鳥	○			
31		ヒヨドリ	ヒヨドリ	樹林	留鳥	○	○	○	○
32		ウグイス	ウグイス	樹林	留鳥	○			○
33		エナガ	エナガ	樹林	留鳥	○	○	○	○
34		メジロ	メジロ	樹林	留鳥	○	○	○	
35		ヨシキリ	オオヨシキリ	草地	夏鳥		○		
36		セッカ	セッカ	草地	夏鳥	○	○		
37		チメドリ	ガビチョウ	樹林	留鳥	○	○	○	○
38		ムクドリ	ムクドリ	農耕	留鳥	○	○	○	○
39		ヒタキ	ツグミ	樹林、農	冬鳥				○
40			ジョウビタキ	樹林、農	冬鳥				○
41		スズメ	スズメ	家屋	留鳥	○	○	○	○
42		セキレイ	キセキレイ	水辺(陸)	留鳥			○	○
43			ハクセキレイ	水辺(陸)	留鳥	○	○	○	○
44			セグロセキレイ	水辺(陸)	留鳥	○	○	○	○
45		アトリ	カワラヒワ	農耕	留鳥	○	○	○	○
46			ベニマシコ	草地	冬鳥				○
47			シメ	樹林	冬鳥				○
48		ホオジロ	ホオジロ	草地	留鳥	○	○	○	○
49			カシラダカ	樹林、草	冬鳥				○
50			アオジ	樹林、草	冬鳥				○
51			オオジュリン	草地	冬鳥				○
計	11 目	29 科	51 種			36 種	25 種	28 種	36 種

注1) 種名、科の配列等は、「日本鳥類目録 改訂第7版」(2012年、日本鳥学会)に従った。

注2) 生息環境は、主に「原色日本野鳥図鑑〈陸鳥編〉および〈水鳥編〉」(平成7年、中村登流・中村雅彦)および「レッドデータブック東京2013～東京都の保護上重要な野生生物種(本土部)解説版～」(平成25年、東京都環境保全局自然保護部)を参考にした。

注3) 渡り区分は、主に「原色日本野鳥図鑑〈陸鳥編〉および〈水鳥編〉」(平成7年、中村登流・中村雅彦)および「レッドデータブック東京2013～東京都の保護上重要な野生生物種(本土部)解説版～」(平成25年、東京都環境保全局自然保護部)を参考にした。

表 7-14(1) 評価書と事後調査の確認状況（鳥類）

No.	目名	科名	種名	生息環境	渡り区分	評価書	H30 年度 事後調査
1	キジ	キジ	キジ	草地	留鳥	○	○
2			コジュケイ	樹林	留鳥	○	○
3	カモ	カモ	オカヨシガモ	水辺(陸)	冬鳥		○
4			マガモ	水辺(陸)	冬鳥		○
5			カルガモ	湖沼	留鳥	○	○
6			オナガガモ	湖沼	冬鳥	○	
7	カイツブリ	カイツブリ	カイツブリ	湖沼	留鳥	○	
8	ハト	ハト	カワラバト	田園	留鳥	○	○
9			キジバト	樹林	留鳥	○	○
10	カツオドリ	ウ	カワウ	河川	留鳥	○	○
11	ペリカン	サギ	アオサギ	河川	留鳥	○	○
12			ダイサギ	河川	留鳥	○	○
13			コサギ	河川	留鳥	○	○
14	ツル	クイナ	バン	水辺(陸)	夏鳥		○
15	アマツバメ	アマツバメ	ヒメアマツバメ	家屋	留鳥	○	
16	チドリ	チドリ	イカルチドリ	河川	留鳥		○
17			コチドリ	水辺(陸)	夏鳥	○	
18		シギ	タシギ	水辺(陸)	冬鳥		○
19			クサシギ	水辺(陸)	旅鳥、冬鳥		○
20			キアシシギ	水辺(陸)	旅鳥		○
21			イソシギ	水辺(陸)	留鳥	○	
22	タカ	タカ	ミサゴ	水辺(陸)	留鳥	○	
23			トビ	田園	留鳥	○	○
24			ツミ	樹林	留鳥		○
25			オオタカ	樹林	留鳥	○	○
26			ノスリ	樹林、農耕	冬鳥	○	○
27	ブッポウソウ	カワセミ	カワセミ	水辺(陸)	留鳥	○	○
28	キツツキ	キツツキ	コゲラ	樹林	留鳥	○	○
29			アオゲラ	樹林	留鳥	○	
30	ハヤブサ	ハヤブサ	チョウゲンボウ	草地	留鳥	○	
31	スズメ	モズ	モズ	田園	留鳥	○	○
32		カラス	オナガ	樹林	留鳥		○
33			ハシボソガラス	田園	留鳥	○	○
34			ハシブトガラス	田園	留鳥	○	○
35		シジュウカラ	シジュウカラ	樹林	留鳥	○	○
36		ヒバリ	ヒバリ	草地	留鳥	○	○
37		ツバメ	ツバメ	家屋	夏鳥	○	○
38			コシアカツバメ	家屋	夏鳥	○	
39			イワツバメ	家屋	夏鳥	○	○
40		ヒヨドリ	ヒヨドリ	樹林	留鳥	○	○
41		ウグイス	ウグイス	樹林	留鳥	○	○
42		エナガ	エナガ	樹林	留鳥	○	○
43		メジロ	メジロ	樹林	留鳥	○	○
44		ヨシキリ	オオヨシキリ	草地	夏鳥	○	○
45		セッカ	セッカ	草地	夏鳥	○	○
46		チメドリ	ガビチョウ	樹林	留鳥	○	○
47		ムクドリ	ムクドリ	農耕	留鳥	○	○
48		ヒタキ	ツグミ	樹林、農耕	冬鳥	○	○
49			ジョウビタキ	樹林、 農耕	冬鳥	○	○
50		スズメ	スズメ	家屋	留鳥	○	○

表 7-14(2) 評価書と事後調査の確認状況（鳥類）

No.	目名	科名	種名	生息環境	渡り区分	評価書	H30 年度 事後調査
51	スズメ	セキレイ	キセキレイ	水辺(陸)	留鳥	○	○
52			ハクセキレイ	水辺(陸)	留鳥	○	○
53			セグロセキレイ	水辺(陸)	留鳥	○	○
54		アトリ	カワラヒワ	農耕	留鳥	○	○
55			ベニマシコ	草地	冬鳥	○	○
56			シメ	樹林	冬鳥		○
57		ホオジロ	ホオジロ	草地	留鳥	○	○
58			カシラダカ	樹林、草地	冬鳥	○	○
59			アオジ	樹林、草地	漂鳥	○	○
60			オオジュリン	草地	冬鳥		○
計	14 目	32 科	60 種	—	—	49 種	51 種

注1) 種名、科の配列等は、「日本鳥類目録 改訂第7版」(2012年、日本鳥学会)に従った。

注2) 生息環境は、主に「原色日本野鳥図鑑〈陸鳥編〉および〈水鳥編〉」(平成7年、中村登流・中村雅彦)および「レッドデータブック東京2013～東京都の保護上重要な野生生物種(本土部)解説版～」(平成25年、東京都環境保全局自然保護部)を参考にした。

注3) 渡り区分は、主に「原色日本野鳥図鑑〈陸鳥編〉および〈水鳥編〉」(平成7年、中村登流・中村雅彦)および「レッドデータブック東京2013～東京都の保護上重要な野生生物種(本土部)解説版～」(平成25年、東京都環境保全局自然保護部)を参考にした。

評価書及び事後調査の生息環境区分別の構成、渡り区分別の構成の比較は、表7-15及び表7-16（154ページ）に示すとおりである。

事後調査結果を生息環境区分でみると、調査地域の大部分を占める水辺や草地環境、樹林環境を反映して、カワウやサギ類、セキレイ類等の河川～水辺性の種やキジやホオジロ等の草地性の種、ムクドリやカワラヒワ、モズ等の農耕地～田園性、キジバトやシジュウカラ等の樹林性の種が当地域を特徴付けている。また、河川敷において生態系の上位に位置するツミやオオタカといった猛禽類も確認されており、ツミにおいては採餌行動が確認されている。

生息環境区分別の構成は、評価書と比べて大きな変化はなかった。

事後調査結果を渡りの区分でみると、キジやカルガモ、コサギ、シジュウカラ、ムクドリ等の年間を通じて調査地域に生息する留鳥が3／5（合計33種・65％）を占める一方で、夏鳥及び冬鳥は約1～2割程度であった。

以上のように、調査地域の鳥類相は、河川や河川敷の樹林や草地環境及びその周辺を利用する種を主体とし、関東の低地に広く分布する種で占められていた。

渡り区分別の構成割合は、評価書と比べて事後調査では留鳥の減少、冬鳥の増加など若干の変化がみられるものの、大きな変化はなかった。

表 7-15 生息環境区分別の構成

生息環境区分	評価書		H30 年度事後調査	
	種数	割合	種数	割合
樹林性の種	16(14)	33%(29%)	18	35%
草地性の種	7(8)	14%(16%)	7	14%
水辺(陸)性の種	7(7)	14%(14%)	10	20%
農耕地性の種	2(3)	4%(6%)	2	4%
田園性の種	5(5)	10%(10%)	5	10%
河川性の種	4(4)	8%(8%)	5	10%
湖沼性の種	3(3)	6%(6%)	1	2%
家屋性の種	5(5)	10%(10%)	3	6%
計	49	100%	51	100%

注1) 生息環境区分は、新しい知見を採用しており、評価書調査時から変更がある。

注2) 評価書欄の種数及び割合の（カッコ）数字は、評価書調査時の生息環境の区分である。

注3) 樹林性の種は、「樹林・草地性」「樹林・農耕地性」を含めた。

表 7-16 渡り区分別の構成

渡りの区分	評価書		H30 年度事後調査	
	種数	割合	種数	割合
留鳥	36(37)	73%(76%)	33	65%
夏鳥	6(6)	12%(12%)	5	10%
冬鳥	6(5)	12%(10%)	10	20%
漂鳥	1(1)	2%(2%)	1	2%
旅鳥	0(0)	0%(0%)	1	2%
旅鳥、冬鳥	0(0)	0%(0%)	1	2%
計	49	100%	51	100%

注1) 渡りの区分は、新しい知見を採用しており、評価書調査時から変更がある。

注2) 評価書欄の種数及び割合の(カッコ)数字は、評価書調査時の渡りの区分である。

b. 注目すべき種

注目すべき種は表7-17(155ページ)に示すとおり、キジ、ダイサギ、コサギ、バン、イカルチドリ、タシギ、クサシギ、キアシシギ、トビ、ツミ、オオタカ、ノスリ、カワセミ、モズ、ヒバリ、ウグイス、エナガ、オオヨシキリ、セグロセキレイ、ベニマシコ、オオジュリンの21種であった。

注目すべき種の確認状況は表7-18(156ページ)に、確認位置は図7-9(157ページ)に示すとおりである。

評価書及び事後調査の注目すべき種の確認状況は、表7-19(158ページ)に示すとおりである。

評価書で確認された種で、事後調査で確認されなかった種として、カイツブリ、ヒメアマツバメ、コチドリ、イソシギ、ミサゴ、アオゲラ、チョウゲンボウ、コシアカツバメの8種が挙げられる。また、事後調査で新たに確認された種としてバン、イカルチドリ、タシギ、クサシギ、キアシシギ、ツミ、オオジュリンの7種が挙げられる。

このうち、陸域の種として、樹林性のアオゲラや家屋・その他のヒメアマツバメ、コシアカツバメ及び猛禽類のミサゴやチョウゲンボウが事後調査で確認されなかったが、草地性のオオジュリンや猛禽類のツミが事後調査で新たに確認されている。これらの種は、水辺(陸)、河川、樹林、草地等の環境に広くみられる種である。また、水域の種として、生息環境が水辺の鳥類のうち、カイツブリ、コチドリ、イソシギが事後調査で確認されなかったが、事後調査で新たにバン、イカルチドリ、タシギ、クサシギ、キアシシギが確認されている。これらの種は、水辺(陸)、河川等の環境に広くみられる種である。

上記の種はいずれも確認の有無は偶発的なものであったと考えられ、本事業では河川敷を改変していないことも踏まえると、生息環境の変化に起因するものではないと考えられる。

表 7-17 鳥類注目すべき種一覧

目名	科名	種名	確認時期				選定基準				
			春季	夏季	秋季	冬季	①	②	③	④	⑤
キジ	キジ	キジ	○							VU	NT
ペリカン	サギ	ダイサギ	○	○	○	○				NT	NT
		コサギ				○				NT	NT
ツル	クイナ	バン	○		○					VU	VU
チドリ	チドリ	イカルチドリ				○				VU	VU
	シギ	タシギ				○				VU	VU
		クサシギ	○							VU	VU
		キアシシギ	○							VU	VU
タカ	タカ	トビ	○	○	○	○				VU	NT
		ツミ		○						CR	VU
		オオタカ	○		○				NT	EN	VU
		ノスリ				○				VU	VU
ブッポウソウ	カワセミ	カワセミ	○		○	○				NT	NT
スズメ	モズ	モズ	○		○	○				VU	NT
	ヒバリ	ヒバリ	○							VU	VU
	ウグイス	ウグイス	○			○				NT	NT
	エナガ	エナガ	○	○	○	○				NT	
	ヨシキリ	オオヨシキリ		○						VU	VU
	セキレイ	セグロセキレイ	○	○	○	○				NT	NT
	アトリ	ベニマシコ				○				VU	NT
	ホオジロ	オオジュリン				○				NT	NT
7 目	15 科	21 種	13 種	6 種	8 種	13 種	0 種	0 種	1 種	21 種	20 種

注1) 種名、科の配列等は、「日本鳥類目録 改訂第7版」(2012年、日本鳥学会)に従った。

注2) 重要種の選定基準は以下のとおりである。

①:「文化財保護法」(昭和25年5月30日、法律第214号)

特天:特別天然記念物、天:天然記念物

②:「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律(種の保存法)」(平成4年6月5日、法律第75号)

国内:国内希少野生動植物種

③:「環境省レッドリスト2018の公表について」(平成30年5月、環境省)

EX:絶滅種、EW:野生絶滅、CR+EN:絶滅危惧I類、CR:絶滅危惧IA類、EN:絶滅危惧IB類、VU:絶滅危惧II類、NT:準絶滅危惧、DD:情報不足、LP:絶滅のおそれのある地域個体群

④:「レッドデータブック東京2013～東京都の保護上重要な野生生物種(本土部)解説版～」

(平成25年、東京都環境保全局自然保護部)の「北多摩地区」

EX:絶滅、EW:野生絶滅、CR+EN:絶滅危惧I類、CR:絶滅危惧IA類、EN:絶滅危惧IB類、VU:絶滅危惧II類、NT:準絶滅危惧、DD:情報不足、*:留意種

⑤:「レッドデータブック東京2013～東京都の保護上重要な野生生物種(本土部)解説版～」

(平成25年、東京都環境保全局自然保護部)の「南多摩地区」

EX:絶滅、EW:野生絶滅、CR+EN:絶滅危惧I類、CR:絶滅危惧IA類、EN:絶滅危惧IB類、VU:絶滅危惧II類、NT:準絶滅危惧、DD:情報不足、*:留意種

注3) 数字は確認個体数を示す。

注4) 生息環境は、主に「原色日本野鳥図鑑〈陸鳥編〉および〈水鳥編〉」(平成7年、中村登流・中村雅彦)および「レッドデータブック東京2013～東京都の保護上重要な野生生物種(本土部)解説版～」(平成25年、東京都環境保全局自然保護部)を参考にした。

樹林:平地から山地の樹林地、草地:平地から山地の草原、河川:河川流水、湖沼:湖沼静止水面

水辺(陸):水辺の陸鳥、田園:田園集落と周辺樹林、家屋:家屋建造物と庭園、農耕:農耕地

注5) 渡り区分は、主に「日本鳥類目録 改訂第7版」(2012年、日本鳥学会)および「レッドデータブック東京2013～東京都の保護上重要な野生生物種(本土部)解説版～」(平成25年、東京都環境保全局自然保護部)を参考にした。

留鳥:年間をとおして同じ地域に生息する種

夏鳥:春季に南の地域から渡来して繁殖し、秋季には南の越冬地へ渡去する種

冬鳥:秋季に北の地域から渡来して越冬し、春季には北の繁殖地へ渡去する種

漂鳥:渡り鳥程の長距離移動はしないが、季節ごとに短距離の移動や山地と低地の間を往復移動する種

表 7-18 注目すべき種（鳥類）の確認状況

種名	確認状況
キジ	現地調査では、春季に 2 例を確認した。確認地点は、多摩川および浅川の河川敷草地であった。
ダイサギ	現地調査では、春季に 4 例、夏季に 2 例、秋季に 2 例、冬季に 4 例を確認した。確認地点は、多摩川および浅川の礫河原、クリーンセンター上空であった。
コサギ	現地調査では、冬季に 1 例を確認した。確認地点は、浅川の礫河原であった。
バン	現地調査では、春季に 1 例、秋季に 1 例を確認した。確認地点は、多摩川河川敷のたまりであった。
イカルチドリ	現地調査では、冬季に 1 例を確認した。確認地点は、多摩川の礫河原上空であった。
タシギ	現地調査では、冬季に 1 例を確認した。確認地点は、浅川水際草地であった。
クサシギ	現地調査では、春季に 1 例を確認した。確認地点は、根川支流の護岸上であった。
キアシシギ	現地調査では、春季に 2 例を確認した。確認地点は、多摩川および浅川の礫河原であった。
トビ	現地調査では、春季に 1 例、夏季に 1 例、秋季に 3 例、冬季に 2 例を確認した。確認地点は、多摩川および浅川の河川敷、クリーンセンターや浅川水再生センターの上空であった。
ツミ	現地調査では、夏季に 1 例を確認した。確認地点は、多摩川河川敷の落葉広葉樹林であった。
オオタカ	現地調査では、春季に 1 例、秋季に 1 例を確認した。確認地点は、多摩川河川敷の落葉広葉樹林林縁およびクリーンセンター上空であった。
ノスリ	現地調査では、冬季に 1 例を確認した。確認地点は、多摩川の河川敷であった。
カワセミ	現地調査では、春季に 2 例、秋季に 3 例、冬季に 2 例を確認した。確認地点は、多摩川、浅川、根川の流路沿いであった。
モズ	現地調査では、春季に 2 例、秋季に 7 例、冬季に 4 例を確認した。確認地点は、多摩川および浅川の河川敷、根川沿いの落葉広葉樹林、日野高校グラウンド脇、クリーンセンター建物上であった。
ヒバリ	現地調査では、春季に 2 例を確認した。確認地点は、多摩川の河川敷草地上空であった。
ウグイス	現地調査では、春季に 4 例、冬季に 1 例を確認した。確認地点は、多摩川の河川敷高茎草地および落葉広葉樹林であった。
エナガ	現地調査では、春季に 1 例、夏季に 3 例、秋季に 1 例、冬季に 1 例を確認した。確認地点は、多摩川および浅川の河川敷落葉広葉樹林、根川沿いの落葉広葉樹林であった。
オオヨシキリ	現地調査では、夏季に 1 例を確認した。確認地点は、浅川の河川敷高茎草地であった。
セグロセキレイ	現地調査では、春季に 2 例、夏季に 3 例、秋季に 6 例、冬季に 4 例を確認した。確認地点は、多摩川および浅川の礫河原、根川沿いであった。
ベニマシコ	現地調査では、冬季に 1 例を確認した。確認地点は、多摩川の河川敷高茎草地であった。
オオジュリン	現地調査では、冬季に 1 例を確認した。確認地点は、浅川の河川敷高茎草地であった。

表 7-19 評価書と事後調査の確認状況（注目すべき鳥類）

目名	科名	種名	評価書	H30 年度 事後調査
キジ	キジ	キジ	○	○
カイツブリ	カイツブリ	カイツブリ	○	
ペリカン	サギ	ダイサギ	○	○
		コサギ	○	○
ツル	クイナ	バン		○
アマツバメ	アマツバメ	ヒメアマツバメ	○	
チドリ	チドリ	イカルチドリ		○
		コチドリ	○	
	シギ	タシギ		○
		クサシギ		○
		キアシシギ		○
		イソシギ	○	
タカ	タカ	ミサゴ	○	
		トビ	○	○
		ツミ		○
		オオタカ	○	○
		ノスリ	○	○
ブッポウソウ	カワセミ	カワセミ	○	○
キツツキ	キツツキ	アオゲラ	○	
ハヤブサ	ハヤブサ	チョウゲンボウ	○	
スズメ	モズ	モズ	○	○
	ヒバリ	ヒバリ	○	○
	ツバメ	コシアカツバメ	○	
	ウグイス	ウグイス	○	○
	エナガ	エナガ	○	○
	ヨシキリ	オオヨシキリ	○	○
	セキレイ	セグロセキレイ	○	○
	アトリ	ベニマシコ	○	○
		オオジュリン		○
11 目	19 科	29 種	22 種	29 種

(ウ)は虫類・両生類

a. 確認状況

現地調査で確認した種は表7-20に示すとおり、3目11科14種であった（詳細は資料編表3-3（資-41ページ）参照）。

評価書及び事後調査の確認状況は、表7-21(160ページ)に示すとおりである。

評価書と事後調査結果を比較すると、事後調査では、評価書で確認された種より多くの種が確認された。事後調査で新たに確認された種として、ニホンヤモリ、ジムグリ、アオダイショウ、ニホンマムシ、ニホンアマガエル、トウキョウダルマガエルの6種が挙げられる。

表 7-20 は虫類・両生類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	調査時期			
				早春季	春季	夏季	秋季
1	カメ	ヌマガメ	ミシシippアカミミガメ		5		1
2		スッポン	ニホンスッポン		1		
3	有鱗	ヤモリ	ニホンヤモリ				4
4		トカゲ	ヒガシニホントカゲ		1	1	1
5		カナヘビ	ニホンカナヘビ		3		5
6		ナミヘビ	ジムグリ			1	
7			アオダイショウ		1	1	
8		クサリヘビ	ニホンマムシ				1
9	無尾	ヒキガエル	アズマヒキガエル	1			
10		アマガエル	ニホンアマガエル		2		
11		アカガエル	ニホンアカガエル	20	13		
12			ウシガエル		3		
13			トウキョウダルマガエル		1		
14		アオガエル	カジカガエル		18		1
計	3 目	11 科	14 種	2 種	10 種	3 種	6 種

注) 種名、配列等は、主に「日本産爬虫両生類標準和名」（2017年、日本爬虫両棲類学会）に従った。

表 7-21 評価書と事後調査の確認状況（は虫類・両生類確認種一覧）

No.	目名	科名	種名	評価書	H30 年度 事後調査
1	カメ	イシガメ	クサガメ	○	
2		ヌマガメ	ミシシippアカミミガメ	○	○
3		スッポン	ニホンスッポン	○	○
4	有鱗	ヤモリ	ニホンヤモリ		○
5		トカゲ	ヒガシニホントカゲ	○	○
6		カナヘビ	ニホンカナヘビ	○	○
7		ナミヘビ	ジムグリ		○
8			アオダイショウ		○
9		クサリヘビ	ニホンマムシ		○
10	無尾	ヒキガエル	アズマヒキガエル	○	○
11		アマガエル	ニホンアマガエル		○
12		アカガエル	ニホンアカガエル	○	○
13			ウシガエル	○	○
14			トウキョウダルマガエル		○
15		アオガエル	カジカガエル	○	○
計	3 目	12 科	15 種	9 種	14 種

注）種名、配列等は、主に「日本産爬虫両生類標準和名」（2019年、日本爬虫両棲類学会）に従った。

b. 注目すべき種

注目すべき種は表7-22に示すとおり、ニホンスッポン、ニホンヤモリ、ヒガシニホントカゲ、ニホンカナヘビ、ジムグリ、アオダイショウ、ニホンマムシ、ニホンアマガエル、ニホンアカガエル、トウキョウダルマガエル、カジカガエルの11種であった。

注目すべき種の確認状況は表7-23（162ページ）に、確認位置は図7-10（163ページ）に示すとおりである。

評価書及び事後調査の注目すべき種の確認状況は、表7-24（162ページ）に示すとおりである。

事後調査においては、評価書調査で確認されたクサガメが確認されなかったが、新たにニホンヤモリ、ジムグリ、アオダイショウ、ニホンマムシ、ニホンアマガエル、トウキョウダルマガエルが確認された。

クサガメは河川環境に広くみられる種であり、調査地域には、評価書と同様の水域や水辺などの河川環境が存在しており、確認の有無は偶発的なものであったと考えられる。また、本事業は河川環境の改変はなく、工事排水の濁りは少ないことから、生息環境の変化に起因するものではないと考えられる。

表 7-22 は虫類・両生類注目すべき種一覧

No.	目名	科名	種名	調査時期				重要種選定基準				
				早春季	春季	夏季	秋季	①	②	③	④	⑤
1	カメ	スッポン	ニホンスッポン		1					DD	CR+EN	CR+EN
2	有鱗	ヤモリ	ニホンヤモリ				4				*	*
3		トカゲ	ヒガシニホントカゲ		1	1	1				VU	VU
4		カナヘビ	ニホンカナヘビ		3		5				VU	NT
5		ナミヘビ	ジムグリ			1					CR	VU
6			アオダイショウ		1	1					NT	NT
7		クサリヘビ	ニホンマムシ				1				CR	CR+EN
8	無尾	アマガエル	ニホンアマガエル		2						VU	VU
9		アカガエル	ニホンアカガエル	20	13						EN	EN
10			トウキョウダルマガエル		1					NT	EN	EN
11		アオガエル	カジカガエル		18		1				VU	VU
計	3 目	9 科	11 種	1 種	8 種	3 種	5 種	0 種	0 種	2 種	11 種	11 種

注1) 種名、配列等は、主に「日本産爬虫両生類標準和名」（2017年、日本爬虫両生類学会）に従った。

注2) 重要種の選定基準は以下のとおりである。

①：「文化財保護法」（昭和25年5月30日、法律第214号）

特天：特別天然記念物、天：天然記念物

②：「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）」（平成4年6月5日、法律第75号）

国内：国内希少野生動植物種

③：「環境省レッドリスト2018の公表について」（平成30年5月、環境省）

EX：絶滅種、EW：野生絶滅、CR+EN：絶滅危惧I類、CR：絶滅危惧II類、EN：絶滅危惧III類、

VU：絶滅危惧IV類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、LP：絶滅のおそれのある地域個体群

④：「レッドデータブック東京2013～東京都の保護上重要な野生生物種（本土部）解説版～」

（平成25年、東京都環境保全局自然保護部）の「北多摩地区」

EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR+EN：絶滅危惧I類、CR：絶滅危惧II類、EN：絶滅危惧III類、

VU：絶滅危惧IV類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、*：留意種

⑤：「レッドデータブック東京2013～東京都の保護上重要な野生生物種（本土部）解説版～」

（平成25年、東京都環境保全局自然保護部）の「南多摩地区」

EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR+EN：絶滅危惧I類、CR：絶滅危惧II類、EN：絶滅危惧III類、

VU：絶滅危惧IV類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、*：留意種

注3) 数字は確認例数を示す。

表 7-23 注目すべき種（は虫類・両生類）の確認状況

種名	確認状況
ニホンスッポン	現地調査では、春季に幼体 1 個体を確認した。確認地点は、浅川流路であった。
ニホンヤモリ	現地調査では、秋季に成体 4 個体を確認した。確認地点は、道路脇水抜きパイプ内であった。
ヒガシニホントカゲ	現地調査では、春季に幼体 1 個体、夏季に幼体 1 個体、秋季に成体 1 個体を確認した。確認地点は、根川支流護岸上および堤防法面草地であった。
ニホンカナヘビ	現地調査では、春季に成体 3 個体、秋季に幼体 4 個体、成体 1 個体を確認した。確認地点は多摩川河川敷の草地および広葉樹林、堤防法面草地であった。
ジムグリ	現地調査では、夏季に成体 1 個体を確認した。確認地点は、堤防法面草地であった。
アオダイショウ	現地調査では、春季に成体 1 個体、夏季に成体 1 個体を確認した。確認地点は、根川支流水路内および水際護岸上であった。
ニホンマムシ	現地調査では、秋季に幼体 1 個体を個体を確認した。確認地点は、多摩川河川敷草地であった。
ニホンアマガエル	現地調査では、春季に 2 個体の鳴き声を確認した。確認地点は、多摩川河川敷草地であった。
ニホンアカガエル	現地調査では、春季に幼生 13 個体、早春季に卵塊 10 個および幼生 10 個体を確認した。確認地点は、多摩川河川敷のたまり及び根川支流水路内であった。
トウキョウダルマガエル	現地調査では、春季に成体 1 個体を確認した。確認地点は、根川流路内であった。
カジカガエル	現地調査では、春季に成体 1 個体および 17 個体の鳴き声、秋季に成体 1 個体を確認した。確認地点は、浅川流路内および根川支流護岸上であった。

表 7-24 評価書と事後調査の確認状況（注目すべきは虫類・両生類）

目名	科名	種名	評価書	H30 年度 事後調査
カメ	イシガメ	クサガメ	○	
	スッポン	ニホンスッポン	○	○
有鱗	ヤモリ	ニホンヤモリ		○
	トカゲ	ヒガシニホントカゲ	○	○
	カナヘビ	ニホンカナヘビ	○	○
	ナミヘビ	ジムグリ		○
		アオダイショウ		○
	クサリヘビ	ニホンマムシ		○
無尾	アマガエル	ニホンアマガエル		○
	アカガエル	ニホンアカガエル	○	○
		トウキョウダルマガエル		○
	アオガエル	カジカガエル	○	○
3 目	12 科	15 種	6 種	11 種

(I) 昆虫類

a. 確認状況

現地調査で確認した種は、表7-25(165ページ)に示すとおり、14目140科527種であった。(詳細は資料編表3-4(1)～(14)(資-43～資-69ページ)参照)。

目別では、コウチュウ目が28科170種と最も多く、次いでカメムシ目の25科94種、チョウ目の20科88種であった。

環境別の確認状況としては、河川敷に広く分布するエノキやムクノキ、オニグルミやヤナギ等の樹林では、アブラゼミやヤマトタマムシ、コクワガタ、ヤナギリハムシ、モンスズメバチ、クロアゲハ、コムスジ等の樹林性の種を確認した。

ススキやヨシを主体とする高茎草地では、ショウリョウバッタやホシハラビロカメムシ、スナハラゴミムシ、イチモンジセセリ等を確認した。

カワラヨモギやカワラハハコ等の低茎草地から自然裸地にかけては、ウスバカマキリやマツムシ、マダラバッタ、セグロイナゴ、ヨモギハムシ等の礫河原やその周辺の低茎草地に特徴的な種を確認した。

堤防法面のチガヤ等の草地では、ショウリョウバッタモドキやギンイチモンジセセリ、ジャコウアゲハ、アカタテハ等を確認した。

多摩川河川敷のワンド状の池では、アオイトトンボやギンヤンマ、マツモムシ等の止水性の種を確認した。

多摩川や根川の流路沿いでは、ハグロトンボ、ヒゲナガカワトビケラ等の流水性の種を確認した。

評価書及び事後調査の確認状況は、表7-26(165ページ)に示すとおりである。

確認状況をみると、ほとんどの目区分で、科数、種数とも事後調査において増加しているが、目レベルの種数の構成をみると、評価書及び事後調査ともコウチュウ目の種数が最も多く、次いでカメムシ目、チョウ目の順となっており、大きな変化はなかった。

評価書及び事後調査で確認種に変化がみられたが、昆虫類の絶対種数は非常に多く、確認時期における季節の経年変動や河川環境においては出水の間隔や規模といった生息環境の変化により、確認種が変動したものと考えられる。

表 7-25 昆虫類確認状況

No.	目名	科数	種数	主な確認種
1	トンボ	5	10	アオモンイトンボ、ギンヤンマ、ハグロトンボ
2	ゴキブリ	2	2	ヤマトゴキブリ、モリチャバネゴキブリ
3	カマキリ	1	3	ハラビロカマキリ、コカマキリ、オオカマキリ
4	バッタ	9	34	ショウリョウバッタ、マツムシ、スズムシ
5	ハサミムシ	1	2	ヒゲジロハサミムシ、コバネハサミムシ
6	アザミウマ	1	1	クダアザミウマ科
7	カメムシ	25	94	アブラゼミ、オオヨコバイ、ホソコバネナガカメムシ
8	アミメカゲロウ	2	2	ヤマトクサカゲロウ、ツノトンボ
9	コウチュウ	28	170	マイマイカブリ、コアオハナムグリ、アオバネサルハムシ
10	ハチ	23	70	ヒメアリ、フタモンアシナガバチ、クマバチ
11	シリアゲムシ	1	1	ヤマトシリアゲ
12	ハエ	18	44	アオメアブ、オオハナアブ、ツマグロキンバエ
13	トビケラ	4	6	ヒゲナガカワトビケラ、ウルマーシマトビケラ
14	チョウ	20	88	イチモンジセセリ、ナミアゲハ、ヒメアカタテハ
計	14 目	140 科	527 種	—

注) 配列等は、主に「日本産野生生物目録 無脊椎動物編Ⅱ」(1995年、環境庁)に従った。

表 7-26 評価書と事後調査の確認状況(昆虫類目別確認種数)

No.	目名	評価書		H30 年度 事後調査	
		科数	種数	科数	種数
1	トンボ	5	10	5	10
2	ゴキブリ	1	1	2	2
3	カマキリ	1	4	1	3
4	バッタ	10	33	9	34
5	ハサミムシ	1	2	1	2
6	アザミウマ	0	0	1	1
7	カメムシ	29	79	25	94
8	アミメカゲロウ	2	2	2	2
9	コウチュウ	25	159	28	170
10	ハチ	13	43	23	70
11	シリアゲムシ	1	1	1	1
12	ハエ	10	20	18	44
13	トビケラ	3	4	4	6
14	チョウ	16	75	20	88
計	14 目	117 科	433 種	140 科	527 種

注) 配列等は、主に「日本産野生生物目録 無脊椎動物編Ⅱ」(1995年、環境庁)に従った。

バイトトラップ及びライトトラップ設置地点の環境概要は7-27～表7-28に、その調査結果の概要は表7-29～表7-30（167ページ）に示す。

表 7-27 バイトトラップ設置地点の環境概要

地点	設置地点環境概要
1	多摩川河川敷のハリエンジュ、エノキ等が生育する落葉広葉樹林である。林内は暗く湿潤でイボタノキなど湿った立地を好む植物が生育しているが、林縁には乾燥したイネ科草地も分布する。
2	春季および秋季の設置地点は、多摩川の堤防法面下に位置する池沿いの高茎草地である。池の水際であるため土壌は湿潤で、オギやヨシなどのイネ科植物が密に生育するほか、所々にヤナギ類やアカメガシワ、エノキ等の樹木も生育する。 夏季調査時は河川水位上昇のため、設置地点を変更した。夏季の設置地点は、多摩川の堤防法面下に位置する池沿いの樹林地および高茎草地である。樹林地はハリエンジュ、エノキ、イボタノキなどが生育し、池と堤防法尻に沿って分布する。林縁は湿潤な草地環境となっており、オギやヤブマオなどの高茎草本が生育するほか、所々にアカメガシワ、クズ等も生育する。
3	春季および秋季の設置地点は、浅川の堤防法面下の林縁環境である。法面のイネ科高茎草地と低水敷のハリエンジュ林の境界部に位置し、カナムグラ等のツル植物やマント群落を形成している。 夏季調査時は上記地点がつる植物等の繁茂により立ち入り困難であったため、設置地点を変更したが、夏季の設置地点も浅川の堤防法面下の林縁環境であり、同様の植生であった。

表 7-28 ライトトラップ設置地点の環境概要

地点	設置地点環境概要
1	多摩川河川敷のハリエンジュ、エノキ等が生育する落葉広葉樹林である。林内は暗く湿潤であり、イネ科草本やアケビ類等のツル植物、イボタノキ等の低木が密に繁茂している。
2	多摩川の堤防法面下に位置する池沿いの高茎草地である。設置箇所付近は池より一段高い位置で、単木で生育するエノキの樹陰になっており、周辺にはイタドリやチガヤが生育している。池の水際にはまとまった面積のヨシ群落が分布している。
3	春季および秋季の設置地点は、浅川の低水敷に位置し、ハリエンジュが優占する落葉広葉樹林の林縁部である。林縁にはクズやノイバラがマント群落を形成しており、周辺はオオブタクサ、オギ等が生育する高茎草地となっている。 夏季調査時には上記地点がつる植物等の繁茂により立ち入り困難であったため、設置地点を変更した。夏季の設置地点も、浅川の低水敷に位置し、ハリエンジュが優占する落葉広葉樹林の林縁部である。林床にはアズマネザサが密に繁茂し、林縁にはクズやヘクソカズラがマント群落を形成している。周辺はヒメムカシヨモギ、カモジグサ類等の路傍雑草が生育する草地となっている。

表 7-29 バイトトラップ法調査結果（目別科種数）

目名	1		2		3	
	科数	種数	科数	種数	科数	種数
ゴキブリ	2	2	1	1	1	1
バッタ	1	2	1	1	2	3
ハサミムシ	1	1	0	0	1	1
カメムシ	3	3	2	3	3	3
コウチュウ	4	10	4	14	4	9
ハチ	1	9	1	6	1	6
ハエ	1	1	0	0	2	2
合計	7 目 13 科 28 種		6 目 9 科 25 種		7 目 14 科 25 種	

注) 確認種リストで種数としてカウントしていない種を含めた種数とした。

表 7-30 ライトトラップ法調査結果（目別科種数）

目名	1		2		3	
	科数	種数	科数	種数	科数	種数
カメムシ	2	2	1	1	0	0
コウチュウ	4	12	5	10	3	9
ハチ	2	2	2	5	1	1
ハエ	2	2	1	1	1	2
トビケラ	1	5	2	4	3	4
チョウ	5	17	6	15	4	5
合計	6 目 16 科 40 種		6 目 17 科 36 種		5 目 12 科 21 種	

注) 確認種リストで種数としてカウントしていない種を含めた種数とした。

b. 注目すべき種

注目すべき種は、表7-31（169ページ）に示すとおり、クマスズムシ、マツムシ、ヒゲシロスズ、セグロイナゴ、ショウリョウバッタモドキ、クルマバッタ、エノキカイガラキジラミ、キアシツヤヒラタゴミムシ、ヒメガムシ、キンボシハネカクシ、台湾ンメダカカミキリ、ハイイロヤハズカミキリ、シロスジカミキリ、モンズズメバチ、ウラゴマダラシジミの15種であった。

注目すべき種の確認状況は表7-32（170ページ）に、確認位置は図7-11（171ページ）に示すとおりである。

評価書及び事後調査の注目すべき種の確認状況は、表7-33（172ページ）に示すとおりである。

事後調査で確認されなかった種（7種）と新たに確認された種（8種）があったが、評価書で14種、事後調査では15種と、概ね同程度の注目すべき種が確認された。

評価書で確認されている種のうち、事後調査では、ウスバカマキリ、クマコオロギ、スナハラゴミムシ、ニセトックリゴミムシ、シロヘリツチカメムシ、ギンイチモンジセセリ、アオイトトンボが確認されなかったが、新たに確認された注目種として、低茎草地を生息環境とするクルマバッタ、樹林を生息環境とするシロスジカミキリ、エノキカイガラキジラミ、台湾ンメダカカミキリ、ウラゴマダラシジミ、止水環境を生息環境とするヒメガムシほか、タケ・ササ類を生息環境とするハイイロヤハズカミキリ、開けた環境に生息するキンボシハネカクシの8種が挙げられる。

表 7-31 昆虫類注目すべき種一覧

目名	科名	種名	選定基準					
			①	②	③	④	⑤	⑥
バッタ	コオロギ	クマスズムシ				DD	DD	DD
	マツムシ	マツムシ				CR	CR	CR
	ヒバリモドキ	ヒゲシロスズ				NT		
	バッタ	セグロイナゴ				CR	CR	CR
		ショウリョウバッタモドキ				VU	VU	VU
		クルマバッタ				CR	CR	CR
カメムシ	キジラミ	エノキカイガラキジラミ			NT			
コウチュウ	オサムシ	キアシツヤヒラタゴミムシ				NT		NT
	ガムシ	ヒメガムシ				DD	DD	DD
	ハネカクシ	キンボシハネカクシ				NT	NT	NT
	カミキリムシ	タイワンメダカカミキリ					NT	NT
		ハイイロヤハズカミキリ				VU		
		シロスジカミキリ				NT	NT	NT
ハチ	スズメバチ	モンスズメバチ			DD			
チョウ	シジミチョウ	ウラゴマダラシジミ				DD		
5 目	11 科	15 種	0 種	0 種	2 種	12 種	9 種	10 種

注1) 和名、科の配列、外来種の選出等は、主に「日本産野生生物目録-本邦産野生動植物の種の現状-無脊椎動物編Ⅱ」（1995年、環境庁）に従った。

注2) 重要種の選定基準は以下のとおりである。

①：「文化財保護法」（昭和25年5月30日、法律第214号）

特天：特別天然記念物、天：天然記念物

②：「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）」（平成4年6月5日、法律第75号）

国内：国内希少野生動植物種

③：「環境省レッドリスト2018の公表について」（平成30年5月、環境省）

EX：絶滅種、EW：野生絶滅、CR+EN：絶滅危惧I類、CR：絶滅危惧IIA類、EN：絶滅危惧IIB類、

VU：絶滅危惧II類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、LP：絶滅のおそれのある地域個体群

④：「レッドデータブック東京2013～東京都の保護上重要な野生生物種（本土部）解説版～」

（平成25年、東京都環境保全局自然保護部）の「北多摩地区」

EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR+EN：絶滅危惧I類、CR：絶滅危惧IIA類、EN：絶滅危惧IIB類、

VU：絶滅危惧II類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、*：留意種

⑤：「レッドデータブック東京2013～東京都の保護上重要な野生生物種（本土部）解説版～」

（平成25年、東京都環境保全局自然保護部）の「南多摩地区」

EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR+EN：絶滅危惧I類、CR：絶滅危惧IIA類、EN：絶滅危惧IIB類、

VU：絶滅危惧II類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、*：留意種

⑥：「レッドデータブック東京2013～東京都の保護上重要な野生生物種（本土部）解説版～」

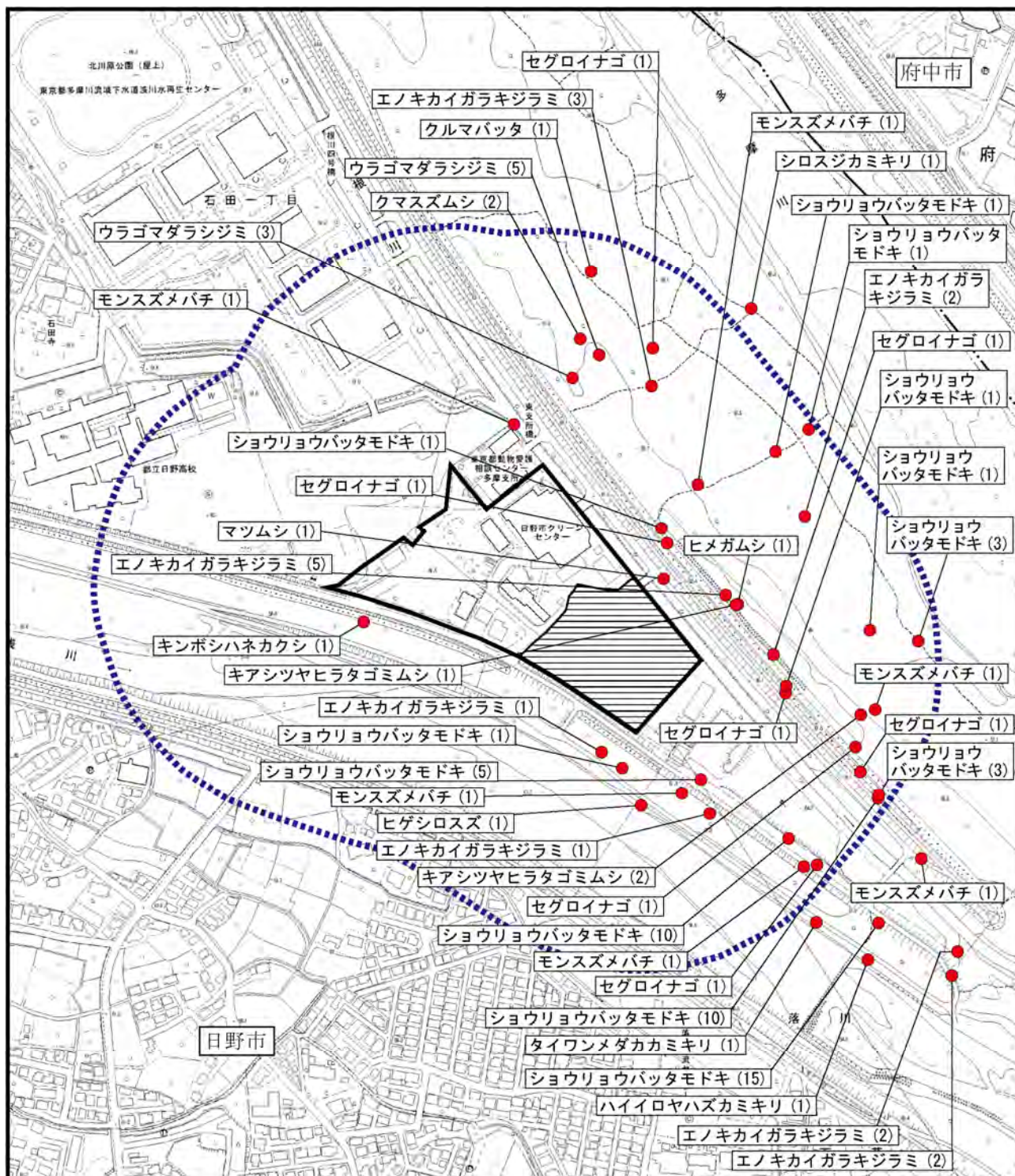
（平成25年、東京都環境保全局自然保護部）の「本土部」

EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR+EN：絶滅危惧I類、CR：絶滅危惧IIA類、EN：絶滅危惧IIB類、

VU：絶滅危惧II類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、*：留意種

表 7-32 注目すべき種（昆虫類）の確認状況

種名	確認状況
クマスズムシ	現地調査では、秋季に2個体を確認した。確認地点は、多摩川河川敷のハリエンジュ林内（バイトトラップSt.生1）であった。
マツムシ	現地調査では、秋季に1個体を確認した。確認地点は、多摩川の堤防法面の草地であった。
ヒゲシロスズ	現地調査では、夏季に1個体を確認した。確認地点は、浅川の林縁草地であった。
セグロイナゴ	現地調査では、夏季に2個体、秋季に5個体を確認した。確認地点は、多摩川および浅川の堤防法面や多摩川河川敷の草地であった。
ショウリョウバッタモドキ	現地調査では、夏季に19個体、秋季に33個体を確認した。確認地点は、多摩川および浅川の河川敷草地、堤防法面草地であった。
クルマバッタ	現地調査では、秋季に1個体を確認した。確認地点は、多摩川河川敷の草地であった。
エノキカイガラキジラミ	現地調査では、春季に3個体、夏季に7個体、秋季に6個体を虫こぶ（ゴール）により確認した。確認地点は、多摩川および浅川の河畔林に生育するエノキであった。
キアシツヤヒラタゴミムシ	現地調査では、春季に1個体、秋季に2個体を確認した。確認地点は、多摩川河川敷の草地（バイトトラップSt.生2）であった。
ヒメガムシ	現地調査では、夏季に1個体を確認した。確認地点は、多摩川河川敷のたまり脇の草地（ライトトラップSt.生2）であった。
キンボシハネカクシ	現地調査では、春季に1個体を確認した。確認地点は、浅川河川敷の林縁（バイトトラップSt.生3）であった。
タイワンメダカカミキリ	現地調査では、春季に1個体を確認した。確認地点は、浅川河川敷の河畔林林縁部であった。
ハイイロヤハズカミキリ	現地調査では、春季に1個体を確認した。確認地点は、浅川河川敷のアズマネザサ群落であった。
シロスジカミキリ	現地調査では、春季に1個体を確認した。確認地点は、多摩川河川敷のヤナギ林であった。
モンスズメバチ	現地調査では、春季に3個体、夏季に3個体を確認した。確認地点は、多摩川および浅川の堤防法面草地、河川敷の河畔林林縁部などであった。
ウラゴマダラシジミ	現地調査では、春季に8個体に個体を確認した。確認地点は、多摩川河川敷のハリエンジュ林内のイボタノキ周辺であった。



この地図は、東京都縮尺1/2500地形図（平成27年度DVD版）を使用したものである。

表 7-33 評価書と事後調査の確認状況（注目すべき昆虫類）

目名	科名	種名	評価書	H30 年度 事後調査
トンボ	アオイトトンボ	アオイトトンボ	○	
カマキリ	カマキリ	ウスバカマキリ	○	
バッタ	コオロギ	クマコオロギ	○	
		クマスズムシ	○	○
	マツムシ	マツムシ	○	○
	ヒバリモドキ	ヒゲシロスズ	○	○
	バッタ	セグロイナゴ	○	○
		ショウリョウバッタモドキ	○	○
		クルマバッタ		○
カメムシ	キジラミ	エノキカイガラキジラミ		○
	ツチカメムシ	シロヘリツチカメムシ	○	
コウチュウ	オサムシ	キアシツヤヒラタゴミムシ	○	○
		スナハラゴミムシ	○	
		ニセトックリゴミムシ	○	
	ガムシ	ヒメガムシ		○
	ハネカクシ	キンボシハネカクシ		○
	カミキリムシ	台湾ンメダカカミキリ		○
		ハイイロヤハズカミキリ		○
		シロスジカミキリ		○
ハチ	スズメバチ	モンスズメバチ	○	○
チョウ	セセリチョウ	ギンイチモンジセセリ	○	
	シジミチョウ	ウラゴマダラシジミ		○
7 目	15 科	22 種	14 種	15 種

イ) 水生生物相の変化の内容及びその程度

水生生物（大型水生植物、付着藻類、魚類、底生動物）の調査地点の環境概要は表7-34のとおりである。

表 7-34 水生生物の調査地点の環境概要

地点	環境概要
St.生 1	護岸整備がされた直線的な河川である。ほとんどが一様な平瀬環境であるが、河岸の一部にツルヨシが生育しており僅かに緩流部がみられる。またオオカナダモなどの沈水植物が多くみられる。 河床には主に礫であり、ほとんどが沈み石である。
St.生 2	平瀬から早瀬、そして淵へ移行する区間である。右岸には湧水起源と思われる細流およびワンドとなっており、特定外来生物であるオオカワチシャなどの水際植物が多く見られる。また、右岸上流側にはツルヨシが繁茂している。 河床は主に礫であり、平瀬、淵では沈み石であるが、早瀬では浮き石が多くなる。また、細流およびワンドは大部分が砂底となっている。
St.生 3	平瀬から早瀬へ移行する区間であり、上流端の右岸には根川および浅川が合流している。春季および夏季調査時には根川合流点の下流側にワンドが形成されていたが、秋季調査時は消失していた。また、下流端左岸には堤内地からの支流が合流しており、合流部下流は淵となっている。水際の多くは石礫の河川敷であるが、右岸の浅川合流点下流の水際や左岸の流入河川の水際にはツルヨシなどの水際植物が生育する。 河床は主に礫であり、平瀬および淵では沈み石であるが、早瀬はほとんどが浮き石である。また、春季および夏季にみられた右岸のワンドは砂底となっており、左岸の流入河川は主に沈み石の礫底となっている。

(7) 大型水生植物

a. 確認状況

現地調査で確認した種は表7-35に示すとおり、15科27種であった（詳細は資料編表3-5（資-71～資-73ページ）参照）。

評価書及び事後調査の確認状況は、表7-36（175ページ）に示すとおりである。

評価書と事後調査を比較すると、評価書で23種、事後調査で27種が確認され、事後調査での確認種が多かったものの、確認種に大きな変化はなかった。

表 7-35 植物確認種一覧

No.	科名	和名	確認時期		
			春季	夏季	秋季
1	タデ	ミゾソバ	○	○	○
2	キンポウゲ	タガラシ	○		
3	アブラナ	タネツケバナ		○	○
4		オランダガラシ	○	○	○
5	アリノトウグサ	オオフサモ	○	○	○
6		ホザキノフサモ	○	○	○
7	セリ	セリ	○	○	○
8	アワゴケ	イケノミズハコベ	○		
9	ゴマノハグサ	オオカワヂシャ	○		○
10		ホナガカワヂシャ	○		
11		カワヂシャ	○		
12	トチカガミ	オオカナダモ	○	○	○
13		コカナダモ	○	○	○
14	ヒルムシロ	エビモ		○	
15		ササバモ		○	○
16		アイノコイトモ		○	○
17	アヤメ	キショウブ		○	○
18	イグサ	イ	○		○
19		コゴメイ	○	○	○
20	イネ	キシウスズメノヒエ		○	
21		クサヨシ	○		○
22		ヨシ	○		○
23		ツルヨシ	○	○	○
24		ヒエガエリ	○		
25	ミクリ	ミクリ		○	○
-		ミクリ属	○	○	○
26	ガマ	Typha 属	○	○	○
27	カヤツリグサ	サンカクイ		○	○
計	15 科	27 種	20 種	19 種	21 種

注1) 和名、科の配列等は、主に「河川水辺の国勢調査最新版平成29年度版生物リスト」（平成29年、国土交通省）に従った。

注2) 「ミクリ属」とした個体は、ミクリやヤマトミクリ等の可能性が考えられるが、同定基質（実）の確認ができなかったため、種の確定に至らなかった。

表 7-36 評価書と事後調査の確認状況（大型水生植物）

No.	科名	和名	評価書				H30 年度事後調査			
			St.生1	St.生2	St.生3	全地区	St.生1	St.生2	St.生3	全地区
1	タデ	ミゾソバ	○	○		○	○	○	○	○
2	キンポウゲ	タガラシ			○	○		○		○
3	アブラナ	タネツケバナ							○	○
4		オランダガラシ	○	○	○	○	○	○	○	○
5	アリノトウグサ	オオフサモ		○	○	○	○		○	○
6		ホザキノフサモ	○		○	○	○			○
7	セリ	セリ	○	○	○	○	○		○	○
8	アワゴケ	イケノミズハコベ	○		○	○			○	○
9	ゴマノハグサ	オオカワヂシャ	○	○	○	○	○	○	○	○
10		ホナガカワヂシャ		○	○	○		○		○
11		カワヂシャ		○	○	○		○	○	○
12	トチカガミ	オオカナダモ	○		○	○	○	○	○	○
13		コカナダモ	○	○		○	○		○	○
14	ヒルムシロ	エビモ							○	○
15		ササバモ	○			○	○			○
16		アイノコイトモ	○	○	○	○	○			○
17	アヤメ	キショウブ					○	○		○
18	イグサ	イ			○	○		○	○	○
19		コゴメイ			○	○		○	○	○
20	イネ	キシユウスズメノヒエ			○	○			○	○
21		クサヨシ	○	○	○	○	○	○	○	○
22		ヨシ						○	○	○
23		ツルヨシ	○	○	○	○	○	○	○	○
24		ヒエガエリ			○	○		○	○	○
25	ミクリ	ミクリ							○	○
-		ミクリ属	○		○	○	○		○	○
26	ガマ	ヒメガマ	○			○				
-		Typha 属	○			○	○		○	○
27	カヤツリグサ	サンカクイ			○	○			○	○
計	15 科	27 種	14 種	11 種	19 種	23 種	15 種	14 種	21 種	27 種

注）和名、科の配列等は、主に「河川水辺の国勢調査 最新版 平成30年度版生物リスト」（平成30年、国土交通省）に従った。

b. 注目すべき種

注目すべき種は表7-37に示すとおり、カワヂシャ、エビモ、ササバモ、ミクリ（ミクリ属を含む）の4種であった。

注目すべき種の確認状況は表7-38（177ページ）に、確認位置は図7-12（178ページ）に示すとおりである。

評価書及び事後調査の注目すべき種の確認状況は、表7-39（177ページ）に示すとおりである。

評価書で3種、事後調査で5種の注目すべき種が確認された。評価書で確認された種はすべて事後調査においても確認されている。また、事後調査で新たに確認された種として、エビモとミクリの2種が挙げられる。

表 7-37 大型水生植物注目すべき種一覧

科名	和名	選定基準				
		①	②	③	④	⑤
ゴマノハグサ	カワヂシャ			NT		
ヒルムシロ	エビモ				VU	VU
	ササバモ				NT	NT
ミクリ	ミクリ			NT	NT	NT
	ミクリ属			※注 3	※注 3	※注 3
3 科	4 種	0 種	0 種	3 種	4 種	4 種

注1) 和名、科の配列等は、主に「河川水辺の国勢調査最新版平成29年度版生物リスト」（平成29年、国土交通省）に従った。

注2) 重要種の選定基準は以下のとおりである。

①：「文化財保護法」（昭和25年5月30日、法律第214号）

特天：特別天然記念物、天：天然記念物

②：「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）」（平成4年6月5日、法律第75号）
国内：国内希少野生動植物種

③：「環境省レッドリスト2018の公表について」（平成30年5月、環境省）

EX：絶滅種、EW：野生絶滅、CR+EN：絶滅危惧I類、CR：絶滅危惧IA類、EN：絶滅危惧IB類、
VU：絶滅危惧II類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、LP：絶滅のおそれのある地域個体群

④：「レッドデータブック東京2013～東京都の保護上重要な野生生物種（本土部）解説版～」
（平成25年、東京都環境保全局自然保護部）の「北多摩地区」

EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR+EN：絶滅危惧I類、CR：絶滅危惧IA類、EN：絶滅危惧IB類、
VU：絶滅危惧II類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、*：留意種

⑤：「レッドデータブック東京2013～東京都の保護上重要な野生生物種（本土部）解説版～」
（平成25年、東京都環境保全局自然保護部）の「南多摩地区」

EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR+EN：絶滅危惧I類、CR：絶滅危惧IA類、EN：絶滅危惧IB類、
VU：絶滅危惧II類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、*：留意種

注3) 「ミクリ属」とした個体は、ミクリやヤマトミクリ等の可能性が考えられるが、同定基質（実）の確認ができなかったため、種の確定に至らなかった。

該当する可能性のある種の重要性を以下に示す。

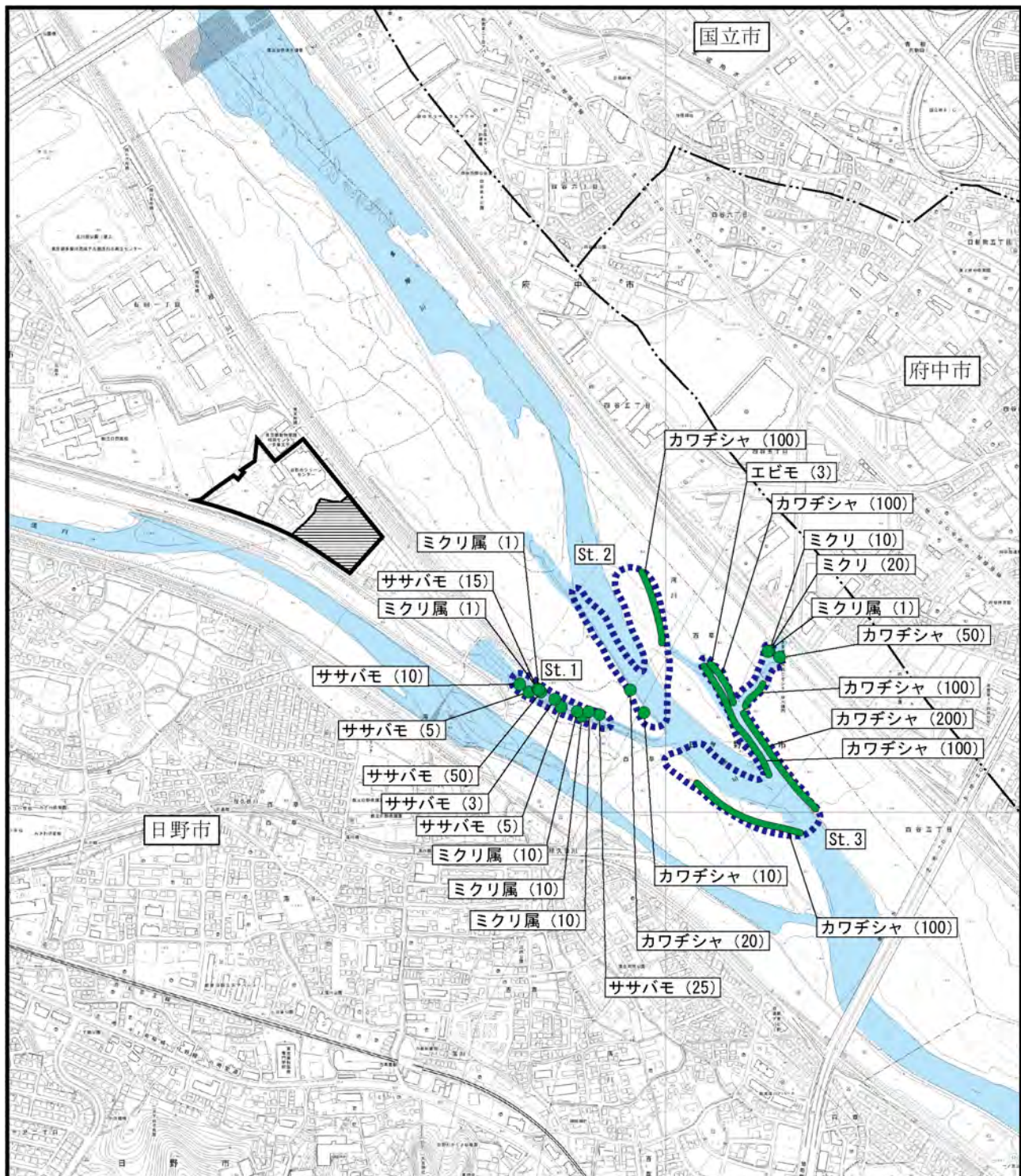
和名	①	②	③	④	⑤
ミクリ			NT	NT	NT
ヤマトミクリ			NT	DD	
タマミクリ			NT		
ナガエミクリ			NT	NT	NT
ヒメミクリ			VU		DD

表 7-38 注目すべき種（大型水生植物）の確認状況

種名	確認状況
カワヂシャ	現地調査では、春季に9箇所780株を確認した。確認地点は、調査地点St.生2及びSt.生3の多摩川および流入支川の水際であった。
エビモ	現地調査では、夏季に1箇所3株を確認した。確認地点は、調査地点St.生3の多摩川流入支川の流路内であった。
ササバモ	現地調査では、夏季に3箇所68株、秋季に4箇所45株を確認した。確認地点は、調査地点St.生1の根川流路内であった。
ミクリ	現地調査では、夏季に1箇所10株、秋季に1箇所20株を確認した。確認地点は、調査地点St.生3の多摩川流入支川の水際であった。
ミクリ属の一種	現地調査では、春季に3箇所12株、夏季に2箇所11株、秋季に1箇所10株を確認した。確認地点は、調査地点St.生1の根川流路内、St.生3の多摩川流入支川の水際であった。

表 7-39 評価書と事後調査の確認状況（注目すべき大型水生植物）

科名	和名	評価書				H30 年度事後調査			
		St.生1	St.生2	St.生3	全地区	St.生1	St.生2	St.生3	全地区
ゴマノハグサ	カワヂシャ		○	○	○		○	○	○
ヒルムシロ	エビモ							○	○
	ササバモ	○			○	○			○
ミクリ	ミクリ							○	○
	ミクリ属	○		○	○	○		○	○
3 科	4 種	2 種	1 種	2 種	3 種	2 種	1 種	4 種	5 種



凡 例

- : 対象事業実施区域
- : 建設予定地
- : 調査範囲
- : 市界
- : 水域
- : 注目すべき種確認位置

図 7-12 大型水生植物注目すべき種確認地点位置図



この地図は、東京都縮尺1/2500地形図（平成27年度DVD版）を使用したものである。

(イ) 付着生物（付着藻類）

a. 確認状況

現地調査で確認した種は表7-40に示すとおり、4綱11目21科77種であった（詳細は資料編表3-6(1)～(2)（資-75～資-77ページ）参照）。

確認種全77種中60種を珪藻綱羽状目の種が占めていた。珪藻綱は河川の付着藻類相において主要な構成種となるグループで、本調査地域でも河川中流域で普通にみられる種を中心に、多くの種を確認した。珪藻綱以外では、藍藻綱、紅藻綱、緑藻綱で数種を確認した。

地点別にみると表7-41（180ページ）に示すとおり、確認種数に大差は認められないが、St.生1、St.生2で珪藻綱羽状目の種が、St.生3で珪藻綱中心目の種が他の地点に比べて相対的に多く確認された。

評価書及び事後調査の確認状況は、表7-42～表7-43（180～181ページ）に示すとおりである。

評価書と事後調査を分類群で比較すると、分類群の構成種に大きな変化はなかった。

地点別、季節別にみると、地点、季節により確認種数、総細胞数及び優占種にばらつきはあるもののおおそ評価書よりも事後調査の方が多く確認されている。

全体に確認種数の増加がみられるが、確認種数、総細胞数及び優占種のばらつきは、付着藻類の多くが水温や流況のわずかな変化に影響を受けやすい生物であることから、評価書と事後調査時における出水頻度・規模等の河川環境や気温、水温、日照時間等の気象条件による生育環境の変化によるものと考えられる。

表 7-40 付着藻類確認種一覧

分類群		全地区	調査地点		
			St.生 1	St.生 2	St.生 3
藍藻綱	クロオコックス目	1	1	1	1
	ネンジュモ目	3	3	3	2
紅藻綱	ベニマダラ目	1	1		
	—	1	1		3
珪藻綱	中心目	3	2	2	39
	羽状目	60	48	43	2
緑藻綱	クロコックム目	2	2	2	1
	ヒビミドロ目	1			1
	カエトフォラ目	1	1	1	1
	サヤミドロ目	1		1	1
	ミドリゲ目	1		1	1
	ホンミドロ目	2		2	
合計 4 綱 11 目 21 科 77 種		77 種	59 種	56 種	51 種

表 7-41 付着藻類出現状況

調査地点	時期	種類数 合計	総細胞数 (細胞数/cm ²)	優占種 (細胞数%)
St.生 1	春	34	317,700	藍藻綱：Homoeothrix janthina (31.2%)
	夏	28	818,400	藍藻綱：Homoeothrix janthina (56.2%)
	秋	29	803,700	珪藻綱：Gomphonema parvulum (24.3%)
	冬	33	1,677,000	珪藻綱：Navicula minima (23.2%)
St.生 2	春	33	175,400	珪藻綱：Nitzschia amphibia (39.5%)
	夏	33	3,196,400	珪藻綱：Nitzschia inconspicua (63.5%)
	秋	26	117,200	珪藻綱：Navicula gregaria (46.8%)
	冬	29	406,100	珪藻綱：Melosira varians (13.8%)
St.生 3	春	28	4,860	珪藻綱：Navicula gregaria (9.9%)
	夏	19	881,200	藍藻綱：Homoeothrix janthina (72.6%)
	秋	14	95,600	珪藻綱：Cocconeis placentula (37.4%)
	冬	32	683,100	珪藻綱：Melosira varians (16.0%)

表 7-42 評価書と事後調査の確認状況 (付着藻類)

分類群		評価書				H30 事後調査			
		全体	St.生1	St.生2	St.生3	全体	St.生1	St.生2	St.生3
藍藻綱	クロオコックス目	1	1	1	1	1	1	1	1
	ネンジュモ目	3	3	3	2	3	3	3	2
紅藻綱	ベニマダラ目					1	1		
	—					1	1		
珪藻綱	中心目	1	1	1	1	3	2	2	3
	羽状目	50	42	37	36	60	49	43	40
緑藻綱	クロコックム目	2	2	2	2	2	2	2	2
	ヒビミドロ目	1		1		1			1
	カエトフォラ目	1	1	1	1	1	1	1	1
	サヤミドロ目	1			1	1		1	1
	ミドリゲ目	1			1	1		1	1
	ホシミドロ目					2		2	
合計 4 綱 11 目		61 種	50 種	46 種	45 種	77 種	60 種	56 種	52 種

注1) 数字は種数を示す。

注2) 種名、科の配列等は、主に「河川水辺の国勢調査 平成26年度版生物リスト」(平成27年、公益財団法人リバーフロント研究所)に従い、未掲載種については「世界の淡水産紅藻」(平成12年6月、熊野ほか)および「小林弘珪藻図鑑〈第1巻〉」(平成18年11月、小林ほか)に従った。

表 7-43 評価書と事後調査の確認状況（付着藻類出現状況）

調査	調査地点	時期	種類数合計	総細胞数 (細胞数/cm ²)	優占種（細胞数%）
評価書	St.生 1	春	34	317,700	藍藻綱： <i>Homoeothrix janthina</i> (31.2%)
		夏	28	818,400	藍藻綱： <i>Homoeothrix janthina</i> (56.2%)
		秋	29	803,700	珪藻綱： <i>Gomphonema parvulum</i> (24.3%)
		冬	33	1,677,000	珪藻綱： <i>Navicula minima</i> (23.2%)
	St.生 2	春	33	175,400	珪藻綱： <i>Nitzschia amphibia</i> (39.5%)
		夏	33	3,196,400	珪藻綱： <i>Nitzschia inconspicua</i> (63.5%)
		秋	26	117,200	珪藻綱： <i>Navicula gregaria</i> (46.8%)
		冬	29	406,100	珪藻綱： <i>Melosira varians</i> (13.8%)
	St.生 3	春	28	4,860	珪藻綱： <i>Navicula gregaria</i> (9.9%)
		夏	19	881,200	藍藻綱： <i>Homoeothrix janthina</i> (72.6%)
		秋	14	95,600	珪藻綱： <i>Cocconeis placentula</i> (37.4%)
		冬	32	683,100	珪藻綱： <i>Melosira varians</i> (16.0%)
H30 年度 事後調査	St.生 1	春	29	264,768	藍藻綱： <i>Homoeothrix janthina</i> (59.0%)
		夏	26	3,430,080	珪藻綱： <i>Gomphonema parvulum</i> (45.0%)
		秋	24	2,187,600	珪藻綱： <i>Nitzschia fonticola</i> (54.1%)
		冬	32	5,878,200	藍藻綱： <i>Homoeothrix janthina</i> (51.4%)
	St.生 2	春	23	74,496	藍藻綱： <i>Homoeothrix janthina</i> (53.0%)
		夏	18	4,384,800	珪藻綱： <i>Navicula pseudacceptata</i> (49.6%)
		秋	25	993,300	珪藻綱： <i>Nitzschia inconspicua</i> (39.9%)
		冬	30	325,800	緑藻綱： <i>Scenedesmus spp.</i> (32.4%)
	St.生 3	春	24	875,520	藍藻綱： <i>Homoeothrix janthina</i> (92.6%)
		夏	24	3,687,840	珪藻綱： <i>Achnantheidium japonicum</i> (27.6%)
		秋	26	3,018,300	珪藻綱： <i>Nitzschia palea</i> (36.8%)
		冬	26	540,000	藍藻綱： <i>Homoeothrix janthina</i> (42.7%)

b. 注目すべき種

注目すべき種は表7-44に示すとおり、タンスイベニマダラが確認された。

注目すべき種の確認状況は表7-45に、確認位置は図7-13（183ページ）に示すとおりである。

評価書及び事後調査の注目すべき種の確認状況は、表7-46に示すとおりである。

評価書では注目すべき種の確認はなかったが、事後調査で新たにタンスベニマダラが確認された。タンスイベニマダラは、St.生1の根川において確認されたもので、きれいな水に生育する種であることから、根川において良好な水質環境が保たれていたものと考えられる。

表 7-44 付着藻類注目すべき種一覧

目名	科名	和名	調査地点			選定基準		
			St.生 1	St.生 2	St.生 3	①	②	③
ベニマダラ	ベニマダラ	タンスイベニマダラ	○					NT

注1) 種名、科の配列等は、主に「河川水辺の国勢調査最新版平成26年度版生物リスト」（2015年、公益財団法人リバーフロント研究所）に従った。

注2) 重要種の選定基準は以下のとおりである。

①：「文化財保護法」（昭和25年5月30日、法律第214号）

特天：特別天然記念物、天：天然記念物

②：「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）」（平成4年6月5日、法律第75号）

国内：国内希少野生動植物種

③：「環境省レッドリスト2018の公表について」（平成30年5月、環境省）

EX：絶滅種、EW：野生絶滅、CR+EN：絶滅危惧I類、CR：絶滅危惧IA類、EN：絶滅危惧IB類、

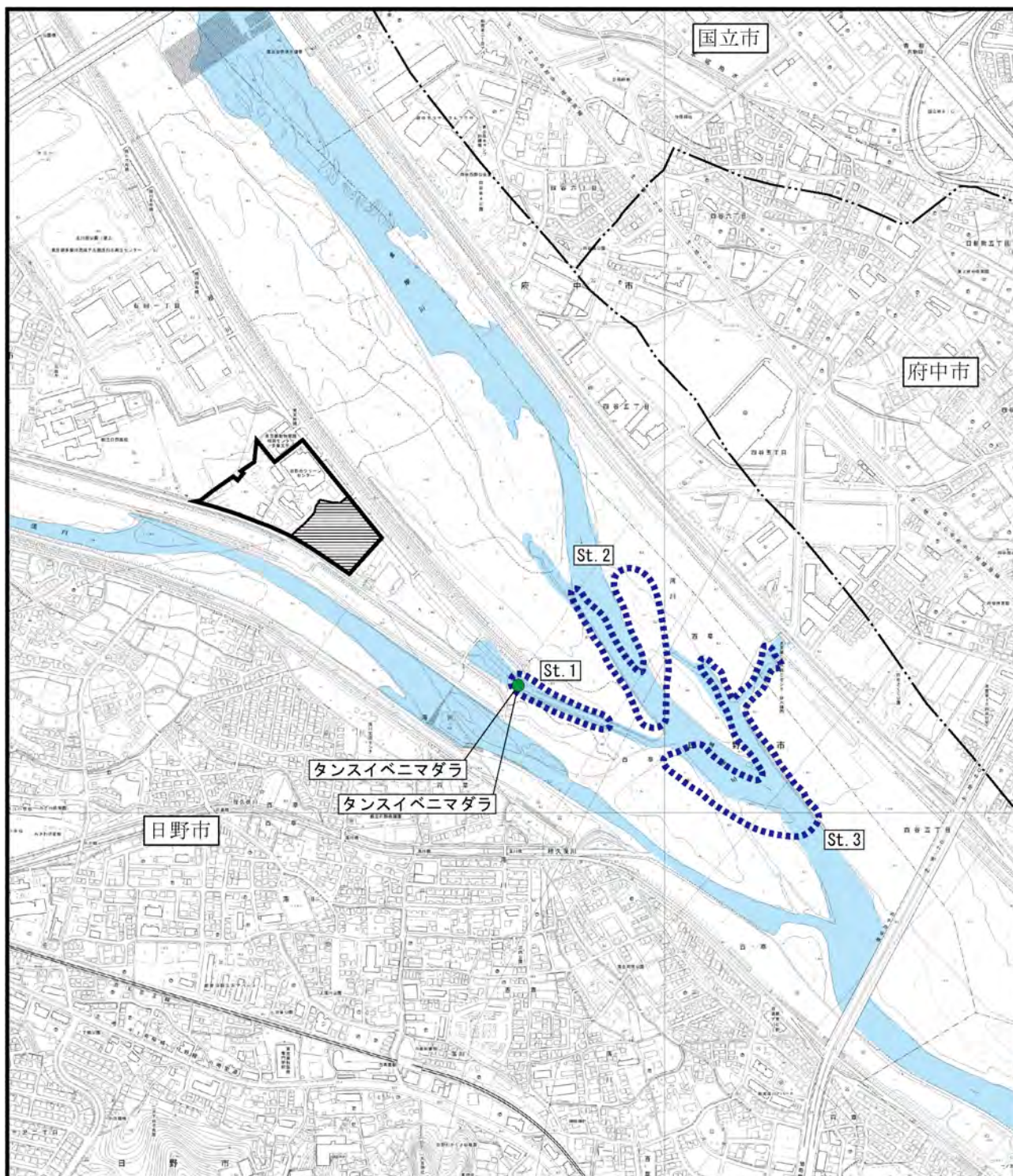
VU：絶滅危惧II類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、LP：絶滅のおそれのある地域個体群

表 7-45 注目すべき種（付着藻類）の確認状況

種名	確認状況
タンスイベニマダラ	現地調査では、秋季および冬季に確認した。確認地点は調査地点St.生1の根川の平瀬であった。

表 7-46 評価書と事後調査の確認状況（注目すべき付着藻類）

綱名	目名	科名	和名	評価書				H30 年度事後調査			
				St.生 1	St.生 2	St.生 3	全地区	St.生 1	St.生 2	St.生 3	全地区
紅藻綱	ベニマダラ	ベニマダラ	タンスイベニマダラ					○			○
1 綱	1 目	1 科	1 種	0 種	0 種	0 種	0 種	1 種	0 種	0 種	1 種



凡 例

- : 対象事業実施区域
- : 建設予定地
- : 調査範囲
- : 市界
- : 水域
- : 注目すべき種確認位置

図 7-13 付着生物（付着藻類）注目すべき種確認地点位置図



この地図は、東京都縮尺1/2500地形図（平成27年度DVD版）を使用したものである。

(ウ) 水生生物（魚類）

a. 確認状況

現地調査で確認した種は表7-47に示すとおり、5目9科25種であった（詳細は資料編表3-7（資-79～資-81ページ）参照）。

調査地点別にみると、表7-48（185ページ）に示すとおり、St生2が他の地点と比べて確認種数が多かった。これは平瀬、早瀬、淵や細流およびワンド等の多様な河川環境が見られることから多様な性質の魚類が確認されたと考えられる。確認種数は17種～22種と大きな差はなく、各調査地点は水域で繋がっていることから、魚類相に大きな違いはないと考えられる。個体数でみると、St.生1ではオイカワ、アブラハヤ及びカワヨシノボリ、St.生2ではオイカワ及びアブラハヤ、St.生3ではオイカワが優占しており、全地点でオイカワが優占種となっている。

評価書及び事後調査の確認状況は、表7-49（186ページ）に示すとおりである。

評価書と事後調査を比較すると、事後調査で確認種数が増加しているものの、評価書で確認のなかった外来種であるオオクチバスやカムルチー、移入種のイトモロコが多摩川で確認されており、近年にみられる外来種の生息域拡大など生息種の変化がうかがえる。その他、評価書で確認された種はおおむね事後調査で確認されており、確認種に大きな変化はなかった。

表 7-47 魚類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	調査地点		
				St 生 1	St 生 2	St 生 3
1	コイ	コイ	コイ	○	○	○
2			ギンブナ	○	○	○
3			オイカワ	○	○	○
4			カワムツ	○	○	○
5			ヌマムツ			○
6			アブラハヤ	○	○	○
7			ウグイ	○	○	○
8			モツゴ	○	○	○
9			ムギツク	○	○	
10			タモロコ	○	○	○
11			カマツカ	○	○	○
12			ニゴイ	○	○	○
13			イトモロコ		○	
14		ドジョウ	ドジョウ属	○	○	○
15			ヒガシシマドジョウ	○	○	○
16	ナマズ	ギギ	ギバチ	○		
17		ナマズ	ナマズ		○	○
18	サケ	アユ	アユ		○	○
19	ダツ	メダカ	ミナミメダカ	○	○	○
20	スズキ	サンフィッシュ	オオクチバス			○
21			コクチバス		○	
22		ハゼ	ヌマチチブ		○	
23			カワヨシノボリ	○	○	○
24			ジュズカケハゼ	○	○	
25			カムルチー		○	
25		タイワンドジョウ	カムルチー		○	
計	5 目	9 科	25 種	17 種	22 種	18 種

注）和名、科の配列等は、主に「河川水辺の国勢調査最新版平成29年度版生物リスト」（平成29年、国土交通省）に従った。

表 7-48 地点別魚類確認個体数一覧

No.	種名	調査地点								
		St.生 1			St.生 2			St.生 3		
		春季	夏季	秋季	春季	夏季	秋季	春季	夏季	秋季
1	コイ	1		7	5			10	2	10
2	ギンブナ		1	4		1	9		1	1
3	オイカワ	12	33	112	1	21	124	12	19	27
4	カワムツ	23	9	19			20	11	2	6
5	ヌマムツ							1		
6	アブラハヤ	4	33	37	20	13	118	6	18	2
7	ウグイ			2			1			2
8	モツゴ		3	6		1	20			5
9	ムギツク		2		3		10			
10	タモロコ		3	4	1			1		
11	カマツカ			3			5	1		
12	ニゴイ		8	3			1			1
13	イトモロコ						1			
14	ドジョウ属		2	1	1		3	2		3
15	ヒガシシマドジョウ	8	1	5	9	5	4	6	6	2
16	ギバチ			2						
17	ナマズ				1	1		1		
18	アユ						2	11	1	1
19	ミナミメダカ	7	5	4		2			12	
20	オオクチバス								1	
21	コクチバス				2					
24	ヌマチチブ				1					
23	カワヨシノボリ	12	24	41	2	14	15	8	16	13
22	ジュズカケハゼ			1			2			
25	カムルチー					1				
計	25 種	7 種	12 種	16 種	11 種	9 種	15 種	12 種	10 種	12 種
		17 種			22 種			18 種		

注) 数字は個体数を示す。

表 7-49 評価書と事後調査の確認状況（魚類）

No.	目名	科名	種名	評価書				H30 年度事後調査			
				St.生1	St.生2	St.生3	全体	St.生1	St.生2	St.生3	全体
1	コイ	コイ	コイ	○	○	○	○	○	○	○	○
2			ギンブナ	○		○	○	○	○	○	○
-			フナ属	○		○	○				
3			オイカワ	○	○	○	○	○	○	○	○
4			カワムツ	○		○	○	○	○	○	○
5			ヌマムツ		○		○			○	○
6			アブラハヤ	○	○	○	○	○	○	○	○
7			ウグイ	○	○	○	○	○	○	○	○
8			モツゴ	○	○	○	○	○	○	○	○
9			ムギツク		○		○	○	○		○
10			タモロコ	○		○	○	○	○	○	○
11			カマツカ	○	○	○	○	○	○	○	○
12			ニゴイ	○	○		○	○	○	○	○
13			イトモロコ						○		○
14		ドジョウ	ドジョウ属	○	○		○	○	○	○	○
15			ヒガシシマドジョウ	○	○	○	○	○	○	○	○
16	ナマズ	ギギ	ギバチ	○		○	○	○			○
17		ナマズ	ナマズ	○	○	○	○		○	○	○
18	サケ	アユ	アユ	○	○	○	○		○	○	○
19	ダツ	メダカ	ミナミメダカ	○			○	○	○	○	○
20	スズキ	サンフィッシュ	オオクチバス							○	○
21			コクチバス		○	○	○		○		○
22		ハゼ	ヌマチチブ						○		○
23			カワヨシノボリ	○	○	○	○	○	○	○	○
24			旧トウヨシノボリ類	○	○		○				
25			ウキゴリ		○		○				
26			ジュズカケハゼ					○	○		○
27		タイワンドジョウ	カムルチー						○		○
計	5 目	9 科	27 種	18 種	17 種	15 種	22 種	17 種	22 種	18 種	25 種

注) 和名、科の配列等は、主に「河川水辺の国勢調査 最新版 平成30年度版生物リスト」(平成30年、国土交通省)に従った。

b. 注目すべき種

注目すべき種は表7-50に示すとおり、アブラハヤ、カマツカ、ニゴイ、ドジョウ属、ヒガシシマドジョウ、ギバチ、ナマズ、ミナミメダカ、ヌマチチブ、ジュズカケハゼの10種であった。

注目すべき種の確認状況は表7-51（188ページ）に、確認位置は図7-14（189ページ）に示すとおりである。

評価書及び事後調査の注目すべき種の確認状況は、表7-52（188ページ）に示すとおりである。

評価書で確認されたアブラハヤ、カマツカ、ニゴイ、ドジョウ、シマドジョウ、ギバチ、ナマズ、メダカ南日本集団は、事後調査においても同様に確認されている。また、事後調査で新たに確認された注目される種として、ヌマチチブとジュズカケハゼの2種が挙げられる。ヌマチチブは多摩川上流側（St.生2）で、ジュズカケハゼは多摩川上流側（St.生1）と根川（St.生1）で確認されている。いずれの種も水底に産卵床を造るなどの生態を持ち、多様な河川環境を必要とする種である。

表 7-50 魚類注目すべき種一覧

目名	科名	種名	選定基準				
			①	②	③	④	⑤
コイ	コイ	アブラハヤ				VU	NT
		カマツカ				NT	NT
		ニゴイ				NT	NT
	ドジョウ	ドジョウ属			NT, DD		
		ヒガシシマドジョウ				VU	VU
ナマズ	ギギ	ギバチ			VU	VU	VU
	ナマズ	ナマズ				*	*
ダツ	メダカ	ミナミメダカ			VU	CR+EN	CR+EN
スズキ	ハゼ	ヌマチチブ				*	*
		ジュズカケハゼ			NT	VU	VU
4 目	6 科	10 種	0 種	0 種	4 種	9 種	9 種

注1) 和名、科の配列等は、主に「河川水辺の国勢調査最新版平成29年度版生物リスト」（平成29年、国土交通省）に従った。

注2) 重要種の選定基準は以下のとおりである。

①：「文化財保護法」（昭和25年5月30日、法律第214号）

特天：特別天然記念物、天：天然記念物

②：「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）」（平成4年6月5日、法律第75号）
国内：国内希少野生動植物種

③：「環境省レッドリスト2018の公表について」（平成30年5月、環境省）

EX：絶滅種、EW：野生絶滅、CR+EN：絶滅危惧I類、CR：絶滅危惧II類、EN：絶滅危惧III類、
VU：絶滅危惧IV類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、LP：絶滅のおそれのある地域個体群

④：「レッドデータブック東京2013～東京都の保護上重要な野生生物種（本土部）解説版～」
（平成25年、東京都環境保全局自然保護部）の「北多摩地区」

EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR+EN：絶滅危惧I類、CR：絶滅危惧II類、EN：絶滅危惧III類、
VU：絶滅危惧IV類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、*：留意種

⑤：「レッドデータブック東京2013～東京都の保護上重要な野生生物種（本土部）解説版～」
（平成25年、東京都環境保全局自然保護部）の「南多摩地区」

EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR+EN：絶滅危惧I類、CR：絶滅危惧II類、EN：絶滅危惧III類、
VU：絶滅危惧IV類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、*：留意種

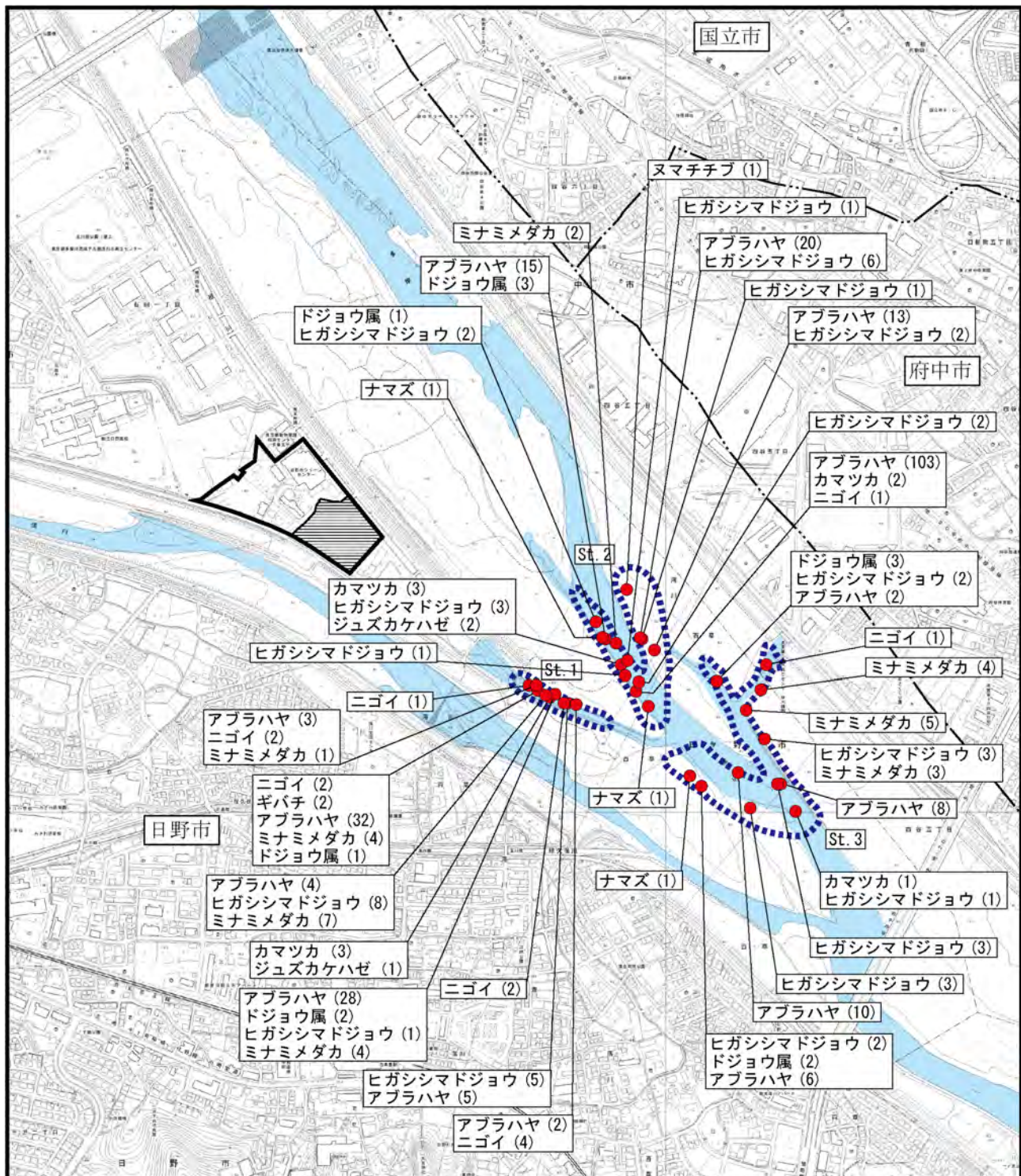
注3) 「ドジョウ属」は「ドジョウ」および「キタドジョウ」の可能性があり、環境省レッドリスト2018においてドジョウが準絶滅危惧、キタドジョウが情報不足に選定されている。

表 7-51 注目すべき種（魚類）の確認状況

種名	確認状況
アブラハヤ	現地調査では、春季に3地点で計30個体、夏季に6地点で計64個体、秋季に5地点で計157個体を確認した。確認地点は、調査地点St.生1～St.生3の主に水際緩流部であった。
カマツカ	現地調査では、春季に1地点で1個体、秋季に3地点で計8個体を確認した。確認地点は、調査地点St.生1の根川の平瀬、St.生2の多摩川のワンド、St.生3の多摩川の淵であった。
ニゴイ	現地調査では、夏季に3地点で計8個体、秋季に4地点で計5個体を確認した。確認地点は、調査地点St.生1の根川の平瀬、St.生2の多摩川のワンド、St.生3の多摩川流入支川であった。
ドジョウ属	現地調査では、春季に2地点で計3個体、夏季に1地点で2個体、秋季に3地点で計7個体を確認した。確認地点は、調査地点St.生1の根川の水際植生、St.生2の多摩川のワンド、St.生3の多摩川のワンドおよび流入支川であった。
ヒガシシマドジョウ	現地調査では、春季に7地点で計23個体、夏季に6地点で計12個体、秋季に4地点で計11個体を確認した。確認地点は、調査地点St.生1の根川の水際植生、St.生2の多摩川のワンドおよび水際植生、St.生3の多摩川のワンドおよび流入支川であった。
ギバチ	現地調査では、秋季に1地点で2個体を確認した。確認地点は、調査地点St.生1の根川の水際植生であった。
ナマズ	現地調査では、春季に2地点で計2個体、夏季に1地点で1個体を確認した。確認地点は、調査地点St.生2の多摩川のワンド、St.生3の多摩川のワンドであった。
ミナミメダカ	現地調査では、春季に1地点で7個体、夏季に6地点で計19個体、秋季に1地点で4個体を確認した。確認地点は、調査地点St.生1の根川の水際植生、St.生2の多摩川のワンド、St.生3の多摩川流入支川であった。
ヌマチチブ	現地調査では、春季に1地点で1個体を確認した。確認地点は、調査地点St.生2の多摩川の平瀬であった。
ジュズカケハゼ	現地調査では、秋季に2地点で計3個体を確認した。確認地点は、調査地点St.生1の根川の水際植生、St.生2の多摩川のワンドであった。

表 7-52 評価書と事後調査の確認状況（注目すべき魚類）

目名	科名	種名	評価書				H30 年度事後調査			
			St.生 1	St.生 2	St.生 3	全地区	St.生 1	St.生 2	St.生 3	全地区
コイ	コイ	アブラハヤ	○	○	○	○	○	○	○	○
		カマツカ	○	○	○	○	○	○	○	○
		ニゴイ	○	○		○	○	○	○	○
	ドジョウ	ドジョウ属	○	○		○	○	○	○	○
		ヒガシシマドジョウ	○	○	○	○	○	○	○	○
ナマズ	ギギ	ギバチ	○		○	○	○			○
	ナマズ	ナマズ	○	○	○	○		○	○	○
ダツ	メダカ	ミナミメダカ	○			○	○	○	○	○
スズキ	ハゼ	ヌマチチブ						○		○
	ハゼ	ジュズカケハゼ					○	○		○
4 目	7 科	9 種	18 種	17 種	15 種	22 種	17 種	22 種	18 種	25 種



凡 例

- : 対象事業実施区域
- : 建設予定地
- : 調査範囲
- : 市界
- : 水域
- : 注目すべき種確認位置

図 7-14 魚類注目すべき種確認地点位置図



この地図は、東京都縮尺1/2500地形図（平成27年度DVD版）を使用したものである。

(I) 水生生物（底生動物）

a. 確認状況

現地調査で確認した種は表7-53に示すとおり、9綱20目68科144種であった（詳細は資料編表3-8(1)～(4)（資-83～資-89ページ）参照）。

確認種は、昆虫綱がほとんどを占め、全144種中119種が昆虫綱であった。昆虫綱のうち、最も多くの種数が確認されたのはカゲロウ目の33種、次いで、ハエ目の29種、トンボ目の19種、トビケラ目の18種の順であった。

調査地点別にみると、確認種数は根川のSt.生1は52種と少なく、多摩川本川上流側のSt.生2が111種と最も多かった。

評価書及び事後調査の確認状況は、表7-54(191ページ)に示すとおりである。

評価書と事後調査を分類群で比較すると、評価書で確認されたハリガネムシ綱及びヘビトンボ（広翅）目が事後調査で確認されなかった。分類群ごとの確認種数は、根川（St.生1）では評価書と事後調査が同程度、多摩川の上流側（St.生2）と下流側（St.生3）では評価書よりも事後調査で増加していたものの、各地点における分類群の構成種に大きな変化はなかった。

表 7-53 底生動物分類群別確認種数

分類群			全体	調査地点		
				St.生 1	St.生 2	St.生 3
普通海綿綱			1	1		
有棒状体綱			1	1	1	1
腹足綱			3	1	2	2
二枚貝綱			1	1	1	1
ミミズ綱			6	2	2	5
ヒル綱			3	3	2	2
軟甲綱			9	6	7	5
昆虫綱	全体		119	36	96	82
	目別	カゲロウ目（蜉蝣目）	33	7	31	27
		トンボ目（蜻蛉目）	19	9	13	15
		カワゲラ目（セキ翅目）	3		3	3
		カメムシ目（半翅目）	4	2	2	3
		トビケラ目（毛翅目）	18	5	15	11
		ハエ目（双翅目）	29	10	23	13
		コウチュウ目（鞘翅目）	13	3	9	10
被喉綱			1	1		
9 綱 20 目 68 科 144 種			144 種	52 種	111 種	98 種

表 7-54 評価書と事後調査の確認状況（底生動物分類群）

分類群			調査地点				H30 事後調査				
			全体	St.生1	St.生2	St.生3	全体	St.生1	St.生2	St.生3	
海綿動物門	普通海綿綱		1	1	1	1	1	1			
扁形動物門	渦虫綱		1	1	1	1	1	1	1	1	
袋形動物門	ハリガネムシ綱		1			1					
軟体動物門	腹足綱		3	3	1		3	1	2	2	
	二枚貝綱		1	1	1	1	1	1	1	1	
環形動物門	ミミズ綱		5	4	2	1	6	2	2	5	
	ヒル綱		4	4	2	3	3	3	2	2	
節足動物門	軟甲綱		7	6	6	6	9	6	7	5	
	昆虫綱	(全体)	108	32	87	72	119	36	96	82	
		(目別)	カゲロウ(蜉蝣)目	30	6	25	7	33	7	31	27
			トンボ(蜻蛉)目	12	4	12	8	19	9	13	15
			カワゲラ(セキ翅)目	3		3		3		3	3
			カメムシ(半翅)目	5	3	3	2	4	2	2	3
			ヘビトンボ(広翅)目	1		1	5				
			トビケラ(毛翅)目	17	4	16	10	18	5	15	11
			ハエ(双翅)目	34	14	23	3	29	10	23	13
	コウチュウ(鞘翅)目	6	1	4	1	13	3	9	10		
外肛動物門	被喉綱	ハネコケムシ目	1	1			1	1			
合計 7 門 10 綱 23 目 78 科 177 種			132 種	53 種	101 種	86 種	144 種	52 種	111 種	98 種	

b. 注目すべき種

注目すべき種は表7-55（192ページ）に示すとおり、スジエビ、モクズガニ、コシボソヤンマ、ヤマサナエ、オナガサナエ、アオサナエ、ホンサナエ、コヤマトンボ、ババアメンボ、キベリマメゲンゴロウ、コオナガミズスマシ、クビボソコガシラミズムシの12種であった。

注目すべき種の確認状況は表7-56（193ページ）に、確認位置は図7-15（194ページ）に示すとおりである。

評価書及び事後調査の注目すべき種の確認状況は、表7-57（195ページ）に示すとおりである。

評価書で確認されたスジエビ、ヤマサナエ、ホンサナエ、アオサナエ、オナガサナエ、コヤマトンボ、キベリマメゲンゴロウ、モクズガニ、コオナガミズスマシについては、事後調査においても同様に確認されている。また、事後調査で新たに確認された種としてコシボソヤンマ、ババアメンボ、クビボソコガシラミズムシの3種が挙げられる。いずれの種も多摩川下流側（St.生3）のワンドの止水域及びその周辺で確認されている。

表 7-55 底生動物注目すべき種一覧

綱名	目名	科名	種名	調査地点			重要種選定基準							
				St. 生 1	St. 生 2	St. 生 3	①	②	③	④	⑤	⑥		
軟甲	エビ	テナガエビ	スジエビ		○	○				*	*	*		
		モクズガニ	モクズガニ	○							*	*		
昆虫	トンボ (蜻蛉)	ヤンマ	コシボソヤンマ			○				CR	VU	EN		
		サナエトンボ	ヤマサナエ			○				EN	VU	EN		
			オナガサナエ	○	○	○				NT				
			アオサナエ	○	○					VU	VU	VU		
			ホンサナエ	○	○	○				VU	NT	VU		
		エソトンボ	コヤマトンボ		○	○				EN	NT	NT		
	カメムシ (半翅)	アメンボ	ババアメンボ			○			NT				DD	
	コウチュウ (鞘翅)	ゲンゴロウ	キベリマメゲンゴロウ		○	○			NT					
		ミズスマシ	コオナガミズスマシ	○					VU					
		コガシラミズムシ	クビボソコガシラミズムシ			○			DD					
2 綱	4 目	9 科	12 種	5 種	6 種	9 種	0 種	0 種	4 種	7 種	7 種	8 種		

注1) 和名、科の配列等は、主に「河川水辺の国勢調査最新版平成29年度版生物リスト」(平成29年、国土交通省)に従った。

注2) 重要種の選定基準は以下のとおりである。

①:「文化財保護法」(昭和25年5月30日、法律第214号)

特天: 特別天然記念物、天: 天然記念物

②:「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律(種の保存法)」(平成4年6月5日、法律第75号)

国内: 国内希少野生動植物種

③:「環境省レッドリスト2018の公表について」(平成30年5月、環境省)

EX: 絶滅種、EW: 野生絶滅、CR+EN: 絶滅危惧I類、CR: 絶滅危惧IA類、EN: 絶滅危惧IB類、VU: 絶滅危惧II類、NT: 準絶滅危惧、DD: 情報不足、LP: 絶滅のおそれのある地域個体群

④:「レッドデータブック東京2013～東京都の保護上重要な野生生物種(本土部)解説版～」(平成25年、東京都環境保全局自然保護部)の「北多摩地区」

EX: 絶滅、EW: 野生絶滅、CR+EN: 絶滅危惧I類、CR: 絶滅危惧IA類、EN: 絶滅危惧IB類、VU: 絶滅危惧II類、NT: 準絶滅危惧、DD: 情報不足、*: 留意種

⑤:「レッドデータブック東京2013～東京都の保護上重要な野生生物種(本土部)解説版～」(平成25年、東京都環境保全局自然保護部)の「南多摩地区」

EX: 絶滅、EW: 野生絶滅、CR+EN: 絶滅危惧I類、CR: 絶滅危惧IA類、EN: 絶滅危惧IB類、VU: 絶滅危惧II類、NT: 準絶滅危惧、DD: 情報不足、*: 留意種

⑥:「レッドデータブック東京2013～東京都の保護上重要な野生生物種(本土部)解説版～」(平成25年、東京都環境保全局自然保護部)の「本土部」

EX: 絶滅、EW: 野生絶滅、CR+EN: 絶滅危惧I類、CR: 絶滅危惧IA類、EN: 絶滅危惧IB類、VU: 絶滅危惧II類、NT: 準絶滅危惧、DD: 情報不足、*: 留意種

表 7-56 注目すべき種（底生動物）の確認状況

種名	確認状況
スジエビ	現地調査では、春季に2地点で計5個体、夏季に1地点で1個体、秋季に1地点で4個体、冬季に1地点で1個体を確認した。確認地点は、調査地点St.生2の多摩川のワンド、St.生3の多摩川の水際植生およびワンドであった。
モクズガニ	現地調査では、夏季に1地点で1個体を確認した。確認地点は、調査地点St.生1の根川の平瀬であった。
コシボソヤンマ	現地調査では、秋季に1地点で1個体を確認した。確認地点は、調査地点St.生3の多摩川の水際植生であった。
ヤマサナエ	現地調査では、秋季に1地点で1個体を確認した。確認地点は、調査地点St.生3の多摩川の水際植生であった。
オナガサナエ	現地調査では、春季に1地点で4個体、夏季に2地点で計3個体、秋季に1地点で8個体、冬季に4地点で計5個体を確認した。確認地点は、調査地点St.生1の根川の早瀬、St.生2の多摩川の早瀬およびワンド、St.生3の多摩川の早瀬であった。
アオサナエ	現地調査では、夏季に1地点で1個体、秋季に3地点で計5個体、冬季に1地点で1個体を確認した。確認地点は、調査地点St.生1の根川の平瀬、St.生2の多摩川のワンドおよび平瀬であった。
ホンサナエ	現地調査では、夏季に1地点で5個体、秋季に7地点で計19個体、冬季に2地点で計3個体を確認した。確認地点は、調査地点St.生1の根川の水際植生、St.生2の多摩川の平瀬およびワンド、St.生3の多摩川の水際植生および流入支川であった。
コヤマトンボ	現地調査では、夏季に1地点で1個体、秋季に5地点で計6個体を確認した。確認地点は、St.生2の多摩川のワンド、St.生3の多摩川の水際植生および流入支川であった。
ババアメンボ	現地調査では、夏季に1地点で2個体を確認した。確認地点は、調査地点St.生3の多摩川流入支川であった。
キベリマメゲンゴロウ	現地調査では、春季に2地点で計5個体、夏季に1地点で2個体、秋季に2地点で計5個体を確認した。確認地点は、St.生2の多摩川のワンド、St.生3の多摩川のワンドおよび流入支川であった。
コオナガミズスマシ	現地調査では、春季に1地点で1個体を確認した。確認地点は、調査地点St.生1の根川の水際植生であった。
クビボソコガシラミズムシ	現地調査では、秋季に1地点で1個体を確認した。確認地点は、調査地点St.生3の多摩川流入支川であった。



表 7-57 評価書と事後調査の確認状況（注目すべき底生動物）

綱名	目名	科名	種名	評価書				H30 年度事後調査			
				St.生1	St.生2	St.生3	全地区	St.生1	St.生2	St.3生	全地区
軟甲綱	エビ	テナガエビ	スジエビ		○	○	○		○	○	○
	エビ	モクスガニ	モクスガニ	○	○		○	○			○
昆虫綱	トンボ(蜻蛉)	ヤンマ	コシボソヤンマ							○	○
		サナエトンボ	ヤマサナエ		○	○	○			○	○
			オナガサナエ		○	○	○	○	○	○	○
			アオサナエ		○		○	○	○		○
			ホンサナエ		○		○	○	○	○	○
		エソトンボ	コヤマトンボ		○		○		○	○	○
	カメムシ(半翅)	アメンボ	ハバアメンボ							○	○
	コウチュウ(鞘翅)	ゲンゴロウ	キベリマメゲンゴロウ		○	○	○		○	○	○
		ミズスマシ	コオナガミズスマシ	○			○	○			○
		コガシラミズムシ	クビボソコガシラミズムシ							○	○
10 綱	23 目	79 科	177 種	52 種	101 種	85 種	132 種	52 種	111 種	98 種	144 種

ウ) 生息（育）環境の変化の内容及びその程度

(ア) 陸上動物（植生断面）

調査地域における生育・生息環境と植物群落の関係を代表する各調査測線ごとに整理するため、植生断面を作成した。L-1～L-4の4断面における植物群落の特徴は表7-58（197ページ）に示すとおりである（植生断面図は資料編図3-1～図3-4（資-91～資93ページ）参照）。

多摩川河川敷であるL-1及びL-2の断面においては、堤防法面にはチガヤ群落が法面草地として管理されており、堤防法面に近い比高の高い河川の安定立地ではハリエンジュ群落、ムクノキーエノキ群集などの高木の木本群落が成立していた。また、L-2では、堤防法面に近い場所にワンド状の池が見られ、ヒメガマ群落、ツルヨシ群落などの湿生植物が成立していた。

浅川河川敷であるL-3においては、アズマネザサ群落、ムクノキーエノキ群集などの河川の安定立地に成立する群落が見られた。

根川、浅川、多摩川が合流する付近のL-4においては、根川から多摩川寄りの比較的比高の高い安定立地にはムクノキーエノキ群集が見られ、多摩川の水際付近では、不安定立地に成立するオオイヌタデ・オオクサキビ群落が見られた。

調査地域の主要な生息（育）環境である多摩川及び浅川を横断的にみると、評価書時点と同様に対象事業実施区域に隣接した堤防法面から河川敷、河川流路となっている。堤防法面から河川敷では樹林、草地、止水といった環境があり、これらが動植物の生息（育）環境となっている。また、両河川の流路及び根川は流水環境となっている。

評価書と事後調査を比べると多摩川では、河川敷の比高の高い安定立地において樹林化が進むなどの植生の遷移がみられる。また、水際付近では、河川流水の影響を受けて地形の変化や植生の変化がみられる。浅川及び根川では、河川環境の自然な遷移に加え、草刈りや造成などの河川管理による影響もみられる。

表 7-58 調査断面における植物群落の特徴

側線	植物群落の特徴
L-1	植生調査範囲上流部で、多摩川本川の左岸堤防から水際へ約 230m の範囲で設定した断面である。堤防法面はチガヤ群落が法面草地として管理がされていた。堤防から 180m まではほとんど比高に変化がなく、ハリエンジュ群落、ムクノキ-エノキ群集といった高木の木本群落、乾性地に生えるススキ群落といった河川の安定立地に成立する群落が見られた。除草、踏圧による攪乱地には、カワラヨモギ-カワラハハコ群落が見られた。本群落は貴重性が高いが、生態系被害防止外来種リストに掲載されているシナダレスズメガヤ群落が近接している。180m～220m はゆるやかに比高が下がり、立地の安定性が少なくなるためか、木本群落は見られず、クズ群落、ススキ群落といった荒地雑草群落が見られた。220m からはさらに比高が下がり、流水耐性がある湿生植物群落であるツルヨシ群集が見られた。
L-2	植生調査範囲中流部で、多摩川本川の左岸堤防から水際へ約 230m の範囲で設定した断面である。堤防法面はチガヤ群落が法面草地が管理がされていた。堤防付近には幅約 30m の細長い池が見られ、ヒメガマ群落及び開放水面が見られた。堤防から約 30～190m はほとんど比高に変化がなかった。約 30～120m はハリエンジュ群落、ムクノキ-エノキ群集といった木本群落、約 120～190m はススキ群落、アズマネザサ群落といった河川の安定立地に成立する群落が見られた。190～220m は、ゆるやかに比高が下がり、立地の安定性が少なくなるためか、流水耐性がある湿生植物群落であるツルヨシ群集が見られた。
L-3	植生調査範囲中流部で、浅川の右岸から水際へ約 40m の範囲で設定した断面である。堤防法面はチガヤ群落が法面草地として管理がされていた。堤防から 37m は、比高はほとんど変わらず、アズマネザサ群落、ムクノキ-エノキ群集といった河川の安定立地に成立する群落が見られた。37～42m は水際のコングリート護岸の上にコセンダングサ群落といった不安定立地に成立する一年草草本群落が見られた。
L-4	植生調査範囲下流部で、浅川右岸水際から、浅川と多摩川境界を経て、多摩川左岸水際に至る約 180m の範囲で設定した断面である。約 0～54m は、浅川の流路となっていた。約 54～72m は浅川の石河原で、水際に不安定立地に成立する一年草草本群落オオイヌタデ-オオクサキビ群落が見られた他は、ツルヨシ群落が見られた。約 72～159m は、約 119～128m に根川で比高が低くなっている他は、ほとんど変わらず、約 72～131m はムクノキ-エノキ群集、約 131～159m は水際までオギ群落が見られた。約 159～180m は多摩川の流路となっていた。

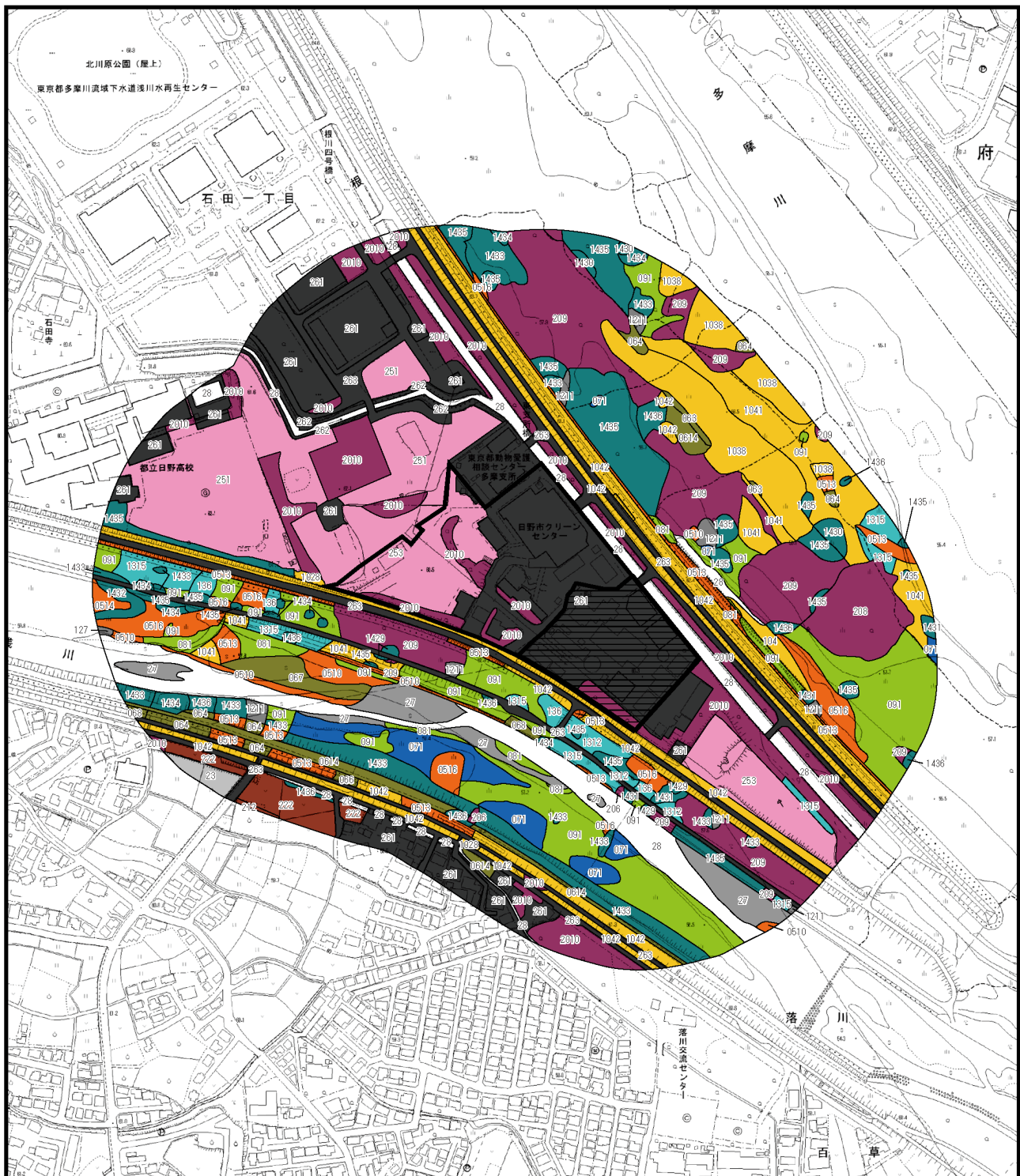
(イ) 植生群落（植生図）

調査地域における生育・生息環境と植物群落の関係を代表する各調査測線ごとに整理するため、陸上動物の調査範囲において植生群落調査を実施し植生図を作成した。植生図は図7-16（199ページ）に示すとおりである。

多摩川河川敷及び浅川河川敷では、ハリエンジュ群落、ムクノキーエノキ群落などの樹林環境やシナダレスズメガヤ群落、オギ群落、オオブタクサ群落などの草地環境が見られた。また多摩川と浅川に挟まれた根川周辺及び対象事業実施区域周辺では、人工構造物や人工裸地、グラウンド等の周りに植栽樹林群が見られた。

評価書調査結果の植生図は図7-17（200ページ）に示すとおりである。

評価書から事後調査にかけて樹林化や草本の植物群落に入れ替わりがみられたものの、樹木環境及び草地環境に大きな変化はみられなかった。植物群落の入れ替わりは、主に河川域でみられる植生の遷移や出水による攪乱又は草刈等の河川管理による植生の変化であると考えられる。



凡 例

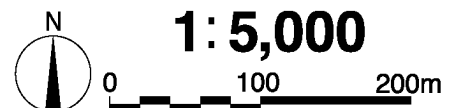
0510	オオイトタチーオオウサキビ群落
0513	コセンダングサ群落
0514	メヒシバエノコログサ群落
0516	オオボクサ群落
063	カワヨモギ・カラハハコ群落
064	ヨモギ・ドハギ群落
066	カラムシ群落
067	アレチハナガサ群落
068	セイタカアワダチソウ群落
0614	カゼウサオバコ群落
071	ヨシ群落
081	ツルヨシ群落
091	オギ群落

104	ヒメガマ群落
1028	セイバンモロコシ群落
1038	シナダレスズメガヤ群落
1041	ススキ群落
1042	チガヤ群落
127	ジャヤナギ・アカメ・ナギ群落
1211	コメ・ナギ群落
136	クコ群落
1312	アズマナギ群落
1315	クズ群落

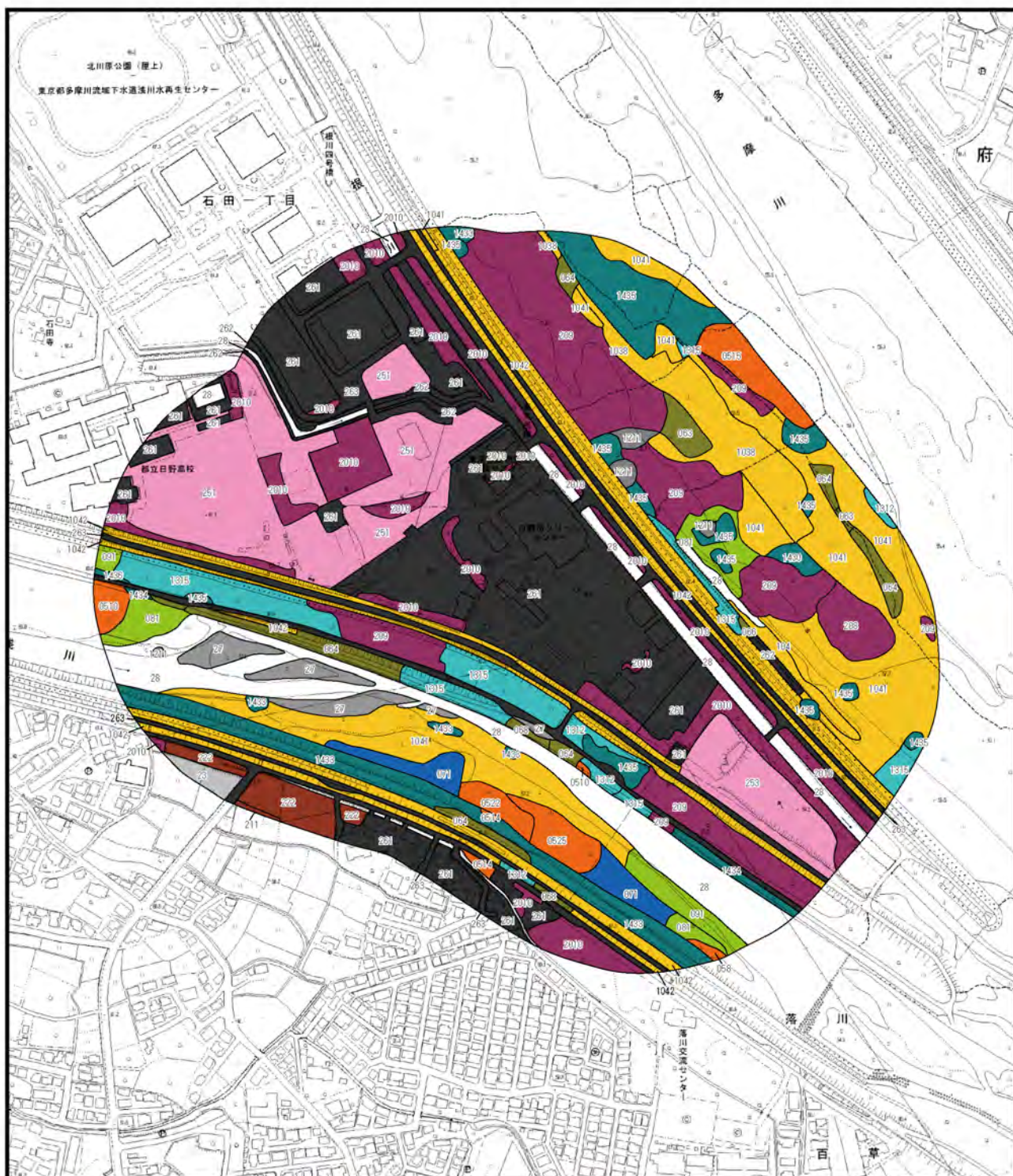
1429	マルチーアカメガシワ群落
1430	マルチーアカメガシワ群落(低木林)
1431	ヤマグル群落
1432	ヤマグル群落(低木林)
1433	オグルミ群落
1434	オグルミ群落(低木林)
1435	ムクノキ・エノキ群落
1436	ムクノキ・エノキ群落(低木林)

212	果樹園
222	畑地(畑地雑草群落)
23	水田
251	公園・グラウンド
253	人工裸地
261	橋道物
262	人工集積物
263	道路
27	自然裸地
28	開放水面

図 7-16 植生図



この地図は、東京都縮尺1/2500地形図(平成27年度DVD版)を使用したものである。



凡 例

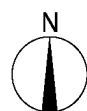
060	ミソツバ群落
061a	オオイタダ・オオササキ群落
061b	コセンダングサ群落
061c	メシバ・エノコログサ群落
061d	オオバコ群落
063	カワラヨモギ・カワハハコ群落
064	ヨモギ・メドハギ群落
066	カラムシ群落
068	セイタカアワダチソウ群落
071	ヨシ群落
081	ツルヨシ群落
091	オギ群落

104	ヒメガマ群落
1038	シナダレスズメガヤ群落
1041	ススキ群落
1042	チガヤ群落
1211	コゴメヤナギ群落
1312	アズマネザサ群落
1315	クズ群落
1430	ヌルデ・アカメガシワ群落(低木林)
1433	オニグルミ群落
1434	オニグルミ群落(低木林)
1435	ムクノキ・エノキ群落
1436	ムクノキ・エノキ群落(低木林)

1437	シンジュ群落
1438	ハリエンジュ群落
1439	植栽樹林群
1440	果樹園
23	畑地
23	水田
251	公園・グラウンド
253	人工裸地

図 7-17 植生図 (評価書)

351	構造物
262	人工構造物
263	道路
27	自然裸地
28	開放水面



1:5,000

0 100 200m

この地図は、東京都縮尺1/2500地形図(平成27年度DVD版)を使用し、たものである。

イ. 生態系

ア) 陸水域生態系の変化の内容及びその程度

(7) 生態系の機能及び構造

a. 環境類型区分

調査地域の土地利用、植生及び動植物のハビタットの観点から、調査地域を5つの環境類型に区分し、各環境類型区分における代表種とその生息（育）環境の利用状況等について整理した。環境類型区分図は、図7-18（203ページ）に示すとおりである。また、そこに生息する生物との関係を整理するため、主要な生息環境と生物種・群集の関係を表7-59(1)～(2)（205～206ページ）に整理した。

(a) 樹林環境

多摩川及び浅川の河川敷に成立する環境で、ハリエンジュ群落が優占するなかに、ムクノキ-エノキ群集やシンジュ群落が点在している。また、浅川右岸にはオニグルミ群落が帯状に広く分布している。このような環境に生息する動物のうち、シジューウカラ、ヒヨドリ等は樹冠部を繁殖、採餌、休息場として利用している。林床は、タヌキ、イタチ等が繁殖、採餌、休息場として利用し、アズマヒキガエル等も採餌や休息場として利用する。また、アブラゼミやシロスジカミキリ、カナブン、コムスジ等の樹林性昆虫類が繁殖、採餌、休息場として利用しているほか、水域沿いの樹林は、ハグロトンボやアオモンイトトンボ等の水生昆虫が成虫期において利用する。

(b) 草地環境

多摩川及び浅川の河川敷や法面に分布する環境で、攪乱の程度や土壌の水分条件等により成立する群落が異なる。これらの草地環境をアズマモグラやタヌキ、キジ、ホオジロ、ニホンカナヘビ、マツムシ、ヒメアカタテハ等が繁殖、採餌、休息場として利用する。

(c) 人工的環境

オオバコ、ススキ、コセンダングサなどの代表される踏圧や除草圧に比較的強い草本類やソメイヨシノ等の植栽樹が生育するが、基本的に植物は少ない。動物は、スズメやツバメ、アオマツムシ、アブラゼミ等が繁殖、採餌、休息場として利用する。そのほか、ヒガシニホントカゲやニホンカナヘビ等が採餌や休息場として利用する。

(d) 止水環境

多摩川河川敷にみられるワンドで、一部にはヒメガマが生育している。ニホンアカガエル、ウシガエルのほか、アオモンイトトンボ、マツモムシ等の止水性昆虫類が繁殖、採餌、休息場として利用している。また、イタチやカワセミ、カルガモ等が採餌や休息場として利用する。

(e) 流水環境

多摩川及び浅川の流水域で、カワヂシャやミクリ属の一種などの植物が生育する。魚類やカゲロウ・トンボ類等の水生昆虫類のほか、カジカガエルが生息している。また、これらの小動物を捕食するイタチやカワウ、アオサギ、カワセミ等は採餌場として利用する。

評価書調査結果の環境類型区分図は、図7-19（204ページ）に示すとおりである。植生図の変化と同様に評価書調査から事後調査にかけて多摩川及び河川敷における環境類型区分の割合に変化がみられるが、その変化はわずかであった。

評価書調査結果の主要な生息環境と生物種・群集の関係は表7-60(1)～(2)(207～208ページ)に示すとおりである。環境類型区分の変化は小さく、評価書と事後調査とで確認種の違いによる種の入れ変わりがあったものの、主要な生息環境と生物種・群集の関係については、変化は小さかった。

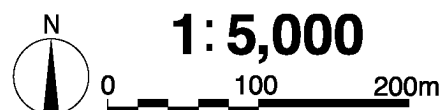
評価書調査結果の環境類型区分ごとの主な生物のハビタットの利用状況（生育場、繁殖場、休息場、採餌場）は、評価書と事後調査とで確認種の違いによる種の入れ変わりがあったものの、環境類型区分ごとの主な生物のハビタットの利用状況（生育場、繁殖場、休息場、採餌場）の変化は小さかった（資料編表3-9～表3-10（資-95～資-97ページ）参照）。



凡 例

- | | | | |
|---|------------|---|---------|
|  | : 対象事業実施区域 |  | : 樹林環境 |
|  | : 建設予定地 |  | : 草地環境 |
|  | : 市界 |  | : 人工的環境 |
|  | : 調査範囲 |  | : 止水環境 |
| | |  | : 流水環境 |

図 7-18 環境類型区分図



1:5,000

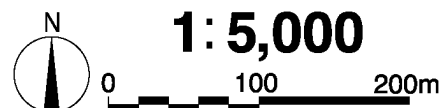
この地図は、東京都縮尺1/2500地形図（平成27年度DVD版）を使用したものである。



凡 例

- | | | | |
|---|------------|---|---------|
|  | : 対象事業実施区域 |  | : 樹林環境 |
|  | : 建設予定地 |  | : 草地環境 |
|  | : 市界 |  | : 人工的環境 |
|  | : 調査範囲 |  | : 止水環境 |
| | |  | : 流水環境 |

図 7-19 環境類型区分図（評価書）



この地図は、東京都縮尺1/2500地形図（平成27年度DVD版）を使用したものである。

表 7-59(1) 環境類型区分と主要な生物種・群集の関係

類型 区分	調査地域 内面積率	植生・ 土地利用	陸上植物	陸上動物	水生生物
樹 林 環境	19%	センダン群落	センダン、アカメガシワ、オオブタクサ、オニグルミ	タヌキ、イタチ、アカネズミ、コゲラ、シジユウカラ、ヒヨドリ、アズマヒキガエル、モリチャバネゴキブリ、シロスジカミキリ、カナブン、モンスズメバチ、テングチョウ、コムスジ、アブラゼミ	—
		シンジュ群落	シンジュ、エノキ、ムクノキ、イボタノキ、ノブドウ		
		ハリエンジュ群落	ハリエンジュ、ムクノキ、アズマネザサ		
		ヌルデ・アカメガシワ群落	ヌルデ、エノキ、ススキ、クズ		
		ヤマグワ群落	ヤマグワ、オニグルミ、エノキ、ノイバラ、クズ		
		オニグルミ群落	オニグルミ、エノキ、アオツツラフシ		
		ムクノキ-エノキ群集	ムクノキ、エノキ、ヌルデ、イボタノキ、ススキ、イタドリ		
		ジャヤナギ-アカメヤナギ群落	アカメヤナギ、ススキ、ヨシ		
		コゴメヤナギ群集	コゴメヤナギ、ムクノキ、エノキ、ヨシ		
草 地 環境	34%	ミゾソバ群落	ミゾソバ、セリ	タヌキ、イタチ、アズマモグラ、キジ、モズ、ホオジロ、ニホンカナヘビ、ニホンアカガエル、コカマキリ、マツムシ、ショウリョウバッタ、ホシハラビロヘリカメムシ、キクスイカミキリ、ギンイチモンジセセリ、イチモンジセセリ、ヒメアカタテハ	—
		オオイヌタデ-オオクサキビ群落	オオイヌタデ、オオクサキビ、コセンダングサ		
		コセンダングサ群落	コセンダングサ、メヒシバ、シロノセンダングサ、クズ		
		メヒシバ-エノコログサ群落	メヒシバ、アキノエノコログサ		
		オオブタクサ群落	オオブタクサ、ツルヨシ、ヤブマメ、クズ		
		ヒメムカシヨモギ-オオアレチノギク群落	ヒメムカシヨモギ、オオアレチノギク		
		メマツヨイグサ-マルバヤハズソウ群落	メマツヨイグサ		
		カナムグラ群落	カナムグラ		
		カワラヨモギ-カワラハハコ群落	カワラヨモギ、メドハギ、カワラサイコ		
		ヨモギ-メドハギ群落	メドハギ、ヨモギ		
		カラムシ群落	カラムシ、チガヤ、オニウシノケグサ		
		アレチハナガサ群落	アレチハナガサ、ヨシ、ミゾソバ		

表 7-59(2) 環境類型区分と主要な生物種・群集の関係

類型 区分	調査地域 内面積率	植生・ 土地利用	陸上植物	陸上動物	水生生物
草 地 環境		セイタカアワダ チソウ群落	セイタカアワダチソ ウ		
		カゼクサ-オオ バコ群落	カゼクサ、オオバコ、 コスズメガヤ		
		ヨシ群落	ヨシ、ミゾソバ		
		ツルヨシ群集	ツルヨシ、ガガイモ		
		オギ群落	オギ、クズ		
		セイバンモロ コシ群落	セイバンモロコシ、 ムラサキツメクサ、 ヤブマメ		
		シナダレスズ メガヤ群落	シナダレスズメガ ヤ、メマツヨイグサ		
		ススキ群落	ススキ、トダシバ		
		チガヤ群落	チガヤ、クズ		
		クコ群落	クコ、クズ、カナムグ ラ		
		アズマネザサ 群落	アズマネザサ、クズ、 オオブタクサ		
		クズ群落	クズ、アズマネザサ		
		果樹園、畑地	ウメ等		
		自然裸地	ー		
人 工 的 環 境	40%	構造物、道路、 公園・グラウン ド、人工裸地	オオバコ、コセンダ ングサ	ツバメ、スズメ、ヒヨ ドリ、アブラゼミ、ア オマツムシ、ヒガシ ニホントカゲ、ニホ ンカナヘビ	ー
		植栽樹林群	ソメイヨシノ、ケヤ キ		
止 水 環境	2%	開放水面	ー	イタチ、カワセミ、カ ルガモ、ニホンアカ ガエル、ウシガエル	アオモンイトトン ボ、ギンヤンマ、マ ツムシ
		ヒメガマ群落	ヒメガマ		
流 水 環境	5%	開放水面（河 川）	ー	カワウ、アオサギ、カ ワセミ、クサガメ、ミ シシippアカミミガ メ、カジカガエル、イ タチ	カワチシャ、ミクリ 属の一種、カワム ツ、オイカワ、シロ タニガワカゲロウ、 オナガサナエ

表 7-60(1) 環境類型区分と主要な生物種・群集の関係（評価書）

類型 区分	調査地域 内面積率	植生・ 土地利用	陸上植物	陸上動物	水生生物
樹 林 環境	18%	シンジュ群落	シンジュ、エノキ、ムクノキ、イボタノキ、ノブドウ	タヌキ、イタチ、アカネズミ、コゲラ、シジユウカラ、ヒヨドリ、アズマヒキガエル、モリチャバネゴキブリ、コクワガタ、ヤマトタムシ、モンズメバチ、クロアゲハ、コミスジ、アブラゼミ	—
		ハリエンジュ群落	ハリエンジュ、ムクノキ、アズマネザサ		
		ヌルデ・アカメガシワ群落	ヌルデ、エノキ、ススキ、クズ		
		オニグルミ群落	オニグルミ、エノキ、アオツツラフジ		
		ムクノキ-エノキ群集	ムクノキ、エノキ、ヌルデ、イボタノキ、ススキ、イタドリ		
		コゴメヤナギ群集	コゴメヤナギ、ムクノキ、エノキ、ヨシ		
草 地 環境	31%	ミゾソバ群落	ミゾソバ、セリ	タヌキ、イタチ、アズマモグラ、キジ、モズ、ホオジロ、ニホンカナヘビ、ニホンアカガエル、ウスバカマキリ、マツムシ、シヨウリョウバッタ、ホシハラビロヘリカメムシ、ヨモギハムシ、ギンイチモンジセセリ、イチモンジセセリ、アカタテハ	—
		オオイヌタデ-オオクサキビ群落	オオイヌタデ、オオクサキビ、コセンダングサ		
		メヒシバ-エノコログサ群落	メヒシバ、アキノエノコログサ		
		ヒメムカシヨモギ-オオアレチノギク群落	ヒメムカシヨモギ、オオアレチノギク		
		メマツヨイグサ-マルバヤハズソウ群落	メマツヨイグサ		
		カナムグラ群落	カナムグラ		
		カワラヨモギ-カワラハハコ群落	カワラヨモギ、メドハギ、カワラサイコ		
		ヨモギ-メドハギ群落	メドハギ、ヨモギ		
		カラムシ群落	カラムシ、チガヤ、オニウシノケグサ		
		セイタカアワダチソウ群落	セイタカアワダチソウ		
		ヨシ群落	ヨシ、ミゾソバ		
		ツルヨシ群集	ツルヨシ、ガガイモ		
		オギ群落	オギ、クズ		
		シナダレスズメガヤ群落	シナダレスズメガヤ、メマツヨイグサ		
		ススキ群落	ススキ、トダシバ		
		チガヤ群落	チガヤ、クズ		
		アズマネザサ群落	アズマネザサ、クズ、オオブタクサ		
		クズ群落	クズ、アズマネザサ		
		果樹園、畑地	ウメ等		
		自然裸地	—		

表 7-60(2) 環境類型区分と主要な生物種・群集の関係（評価書）

類型 区分	調査地域 内面積率	植生・ 土地利用	陸上植物	陸上動物	水生生物
人 工 的 環 境	44%	構造物、道路、公 園・グラウンド、 人工裸地 植栽樹林群	オオバコ、コセンダ ングサ ソメイヨシノ、ケヤ キ	ツバメ、スズメ、ヒヨ ドリ、アブラゼミ、ア オマツムシ、ヒガシニ ホントカゲ、ニホンカ ナヘビ	—
止 水 環境	1%	開放水面 ヒメガマ群落	— ヒメガマ	イタチ、カワセミ、カ イツブリ、ニホンアカ ガエル、ウシガエル	アオイトトンボ、ギ ンヤンマ、マツモム シ
流 水 環境	6%	開放水面（河川）	—	カワウ、アオサギ、カ ワセミ、クサガメ、ミ シシippアカミミガ メ、カジカガエル、イ タチ	カワヂシャ、ミクリ 属の一種、カワム ツ、オイカワ、シロ タニガワカゲロウ、 オナガサナエ

b. 生物の相互関係（食物連鎖）

ここでは生物の相互作用を食物連鎖で示す。現地調査と既存資料を基に、調査地域における代表的な食物連鎖を図7-20（210ページ）に整理した。

(a) 生産者

生産者は、樹林環境に生育するシンジュやハリエンジュ、エノキ、オニグルミ、あるいは草地環境に生育するヨシやススキ、チガヤ等の植物種である。止水環境はヒメガマ、流水環境はカワヂシャ、ミクリ属の一種のほか、付着藻類や植物プランクトンが挙げられる。

(b) 下位消費者

樹林環境や草地環境などに生育する植物の葉や茎、果実、種子などを、バッタ類やカメムシ類、ハムシ類、ゾウムシ類、チョウ類等の昆虫類のほか、アカネズミやカワラヒワ等の植物食性の哺乳類や鳥類が摂食する。止水環境でも同様に、植物の葉や茎、果実、種子などをカルガモなどの植物食性鳥類が摂食する。

流水環境では、付着藻類やプランクトンのほか、水底に堆積した落ち葉等をカゲロウ類やカワゲラ類の底生動物、アユ等の魚類が摂食する。

(c) 中位消費者

バッタ類やコウチュウ類、チョウ類等の昆虫類を、動物食性であるニホントカゲやニホンカナヘビ、アズマヒキガエル、ニホンアカガエル等のは虫類や両生類が捕食するほか、キジ、シジュウカラやヒヨドリ等の雑食性の鳥類が捕食する。流水環境では、カゲロウ類やカワゲラ類等の底生動物や落下昆虫などを、カジカガエルや動植物性魚類であるカワムツやギバチが捕食する。

(d) 上位消費者

アカネズミやアズマモグラ等の小型哺乳類や、ニホントカゲ、ニホンアカガエル等のは虫類や両生類を、イタチ等の哺乳類、ノスリ、モズ等の動物食性鳥類が捕食する。また、止水環境では、魚類や両生類を、動物食性鳥類のカワセミが捕食し、流水環境では、オイカワやアユ等の魚類を動物食性のアオサギ、カワセミが捕食する。

評価書調査における、代表的な食物連鎖は図7-21（211ページ）に示すとおりである。評価書と事後調査とで確認種の違いによる種の入れ変わりがあったものの、代表的な食物連鎖の構造に変化はなかった。

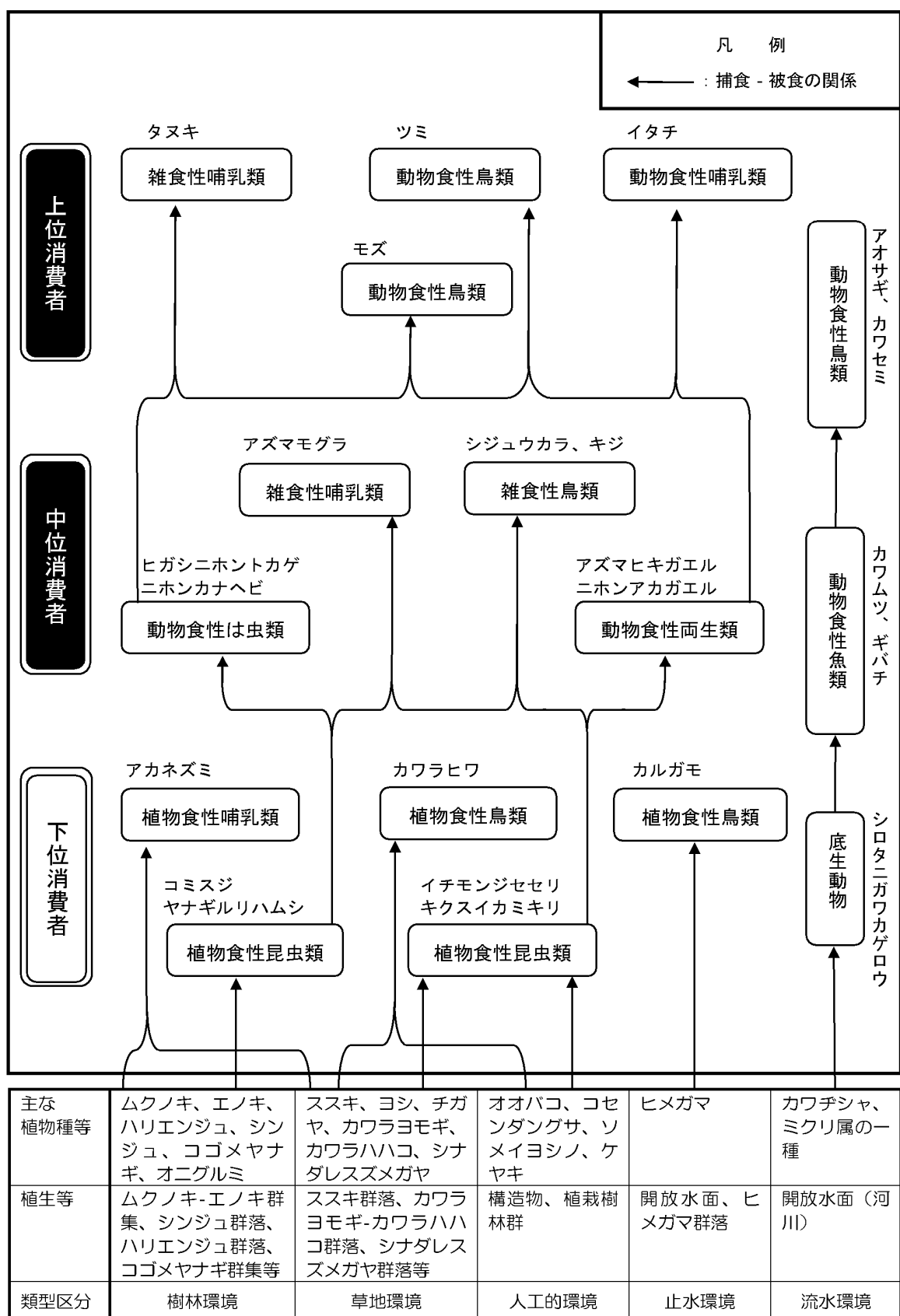


図 7-20 食物連鎖網

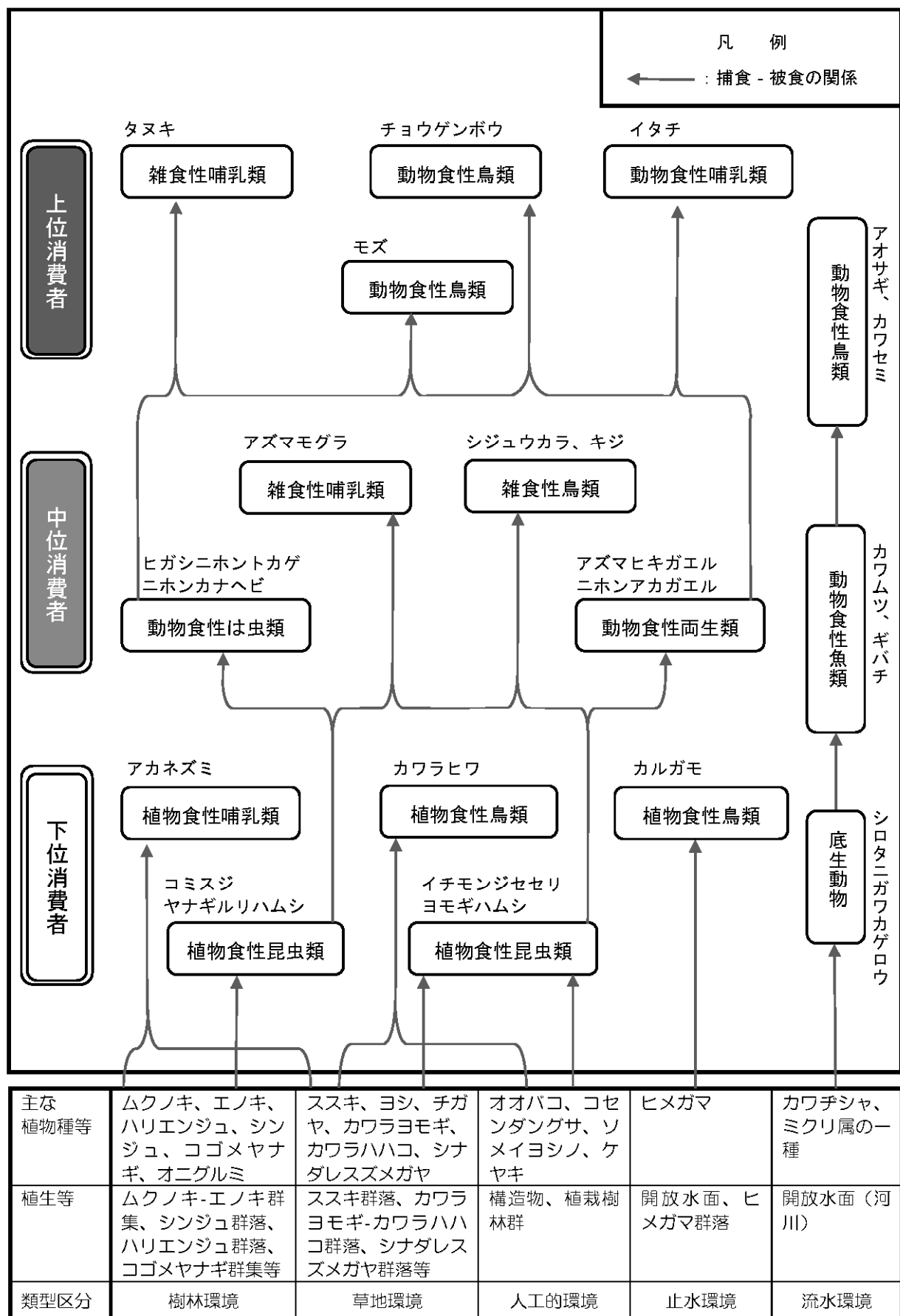


図 7-21 食物連鎖網（評価書）

(イ) 注目される種及び群集

現地調査で確認した動植物について、表7-61に示す基準に基づき、上位性・典型性・特殊性を示す種の選定を行った。選定結果及び理由については、表7-62に示すとおりである。

評価書調査における上位性・典型性・特殊性の選定種及びその選定理由は表7-63（213ページ）に示すとおりである。評価書調査で確認されたチョウゲンボウについては、事後調査で確認がなかったため、同様に鳥類（猛禽類）の上位性となるツミを選定した。また、評価書ではヤマトタマムシを昆虫類の典型性の種として選定していたが、事後調査の結果からヤマトタマムシより典型性が顕著であるカナブンを昆虫類の典型種として選定した。

表 7-61 上位性・典型性・特殊性の選定基準

項目	選定基準
上位性	調査地域において生態系を形成する生物群集において栄養段階の上位に位置する種
典型性	調査地域の生態系の特徴をよく現す種
特殊性	調査地域において占有面積は小規模であっても特殊な環境を指標する種

表 7-62 上位性・典型性・特殊性の選定種及びその選定理由

項目	選定種	選定理由
上位性	イタチ	調査地域内の河川敷を採餌場として広く利用しており、食物連鎖において上位に位置する。
	ツミ	調査地域内の河川敷を採餌場として広く利用しており、食物連鎖において上位に位置する。
	アオサギ	調査地域内の河川（流水域）を採餌場として利用しており、食物連鎖において上位に位置する。
典型性	ムクノキ-エノキ群集	調査地域内に広く分布する木本群落である。一般に河畔林を形成することが多く、河畔林に生息する多くの動植物の生息環境を形成する。
	ススキ群落	調査地域内に広く分布する草本群落である。河川敷内を広く占めており、比較的多くの動物の生息環境を形成する。
	キジ	調査地域内の草地環境に広く生息し、当地域を代表する鳥類である。
	カナブン	落葉広葉樹林に生息する昆虫類の代表種である。調査地域には個体数は比較的多い。
	オイカワ	調査地域内の流水域の魚類では最優占種である。特に河川内の瀬に多い。
	シロタニガワカゲロウ	調査地域内の流水域の底生動物では、優占種のうちの1種である。河川の中流域の瀬の代表種であり、少し汚れた水に生息する種である。
特殊性	該当なし	—

表 7-63 上位性・典型性・特殊性の選定種及びその選定理由（評価書）

項目	選定種	選定理由
上位性	イタチ	調査地域内の河川敷を採餌場として広く利用しており、食物連鎖において上位に位置する。
	チョウゲンボウ	調査地域内の河川敷を採餌場として広く利用しており、食物連鎖において上位に位置する。
	アオサギ	調査地域内の河川（流水域）を採餌場として利用しており、食物連鎖において上位に位置する。
典型性	ムクノキ-エノキ群集	調査地域内に広く分布する木本群落である。一般に河畔林を形成することが多く、河畔林に生息する多くの動植物の生息環境を形成する。
	ススキ群落	調査地域内に広く分布する草本群落である。河川敷内を広く占めており、比較的多くの動物の生息環境を形成する。
	キジ	調査地域内の草地環境に広く生息し、当地域を代表する鳥類である。
	ヤマトタマムシ	エノキ林に生息する昆虫類の代表種である。調査地域には個体数は比較的多い。
	オイカワ	調査地域内の流水域の魚類では最優占種である。特に河川内の瀬に多い。
	シロタニガワカゲロウ	調査地域内の流水域の底生動物では、優占種のうちの1種である。河川の中流域の瀬の代表種であり、少し汚れた水に生息する種である。
特殊性	該当なし	—

②予測条件の状況

ア. 建設作業騒音の状況

事後調査の結果は、「騒音・振動（別紙2）」表2-1（68ページ）に示すとおりであり、敷地境界上の最大値で66dBと評価書の予測結果より10dB程度低かった。

なお、建設作業騒音の調査と併せて河川敷上で簡易に騒音を確認したところ、 L_{A5} は50～55dBであった。

イ. 放流先河川（多摩川・根川）の水質（SS）、流量

降雨時における浮遊物質（SS）の事後調査結果は、根川で3mg/Lと評価書における予測結果を下回ったが、多摩川では3～87mg/Lと評価書における予測結果を上回った。多摩川において予測結果を上回った理由としては、本施設に起因しない多摩川上流からの濁りによるものが大きい（「水質汚濁（別紙3）（93～105ページ）参照」）。

③環境保全のための措置の実施状況

環境保全のための措置の実施状況は、表7-64に示すとおりである。

なお、今回の報告期間中、生物・生態系に係る苦情はなかった。

表 7-64 環境保全のための措置の実施状況

評価書の記載内容	実施状況
・工事騒音の低減 工事にあたっては、低騒音型の機械を用いるとともに、原則として作業時間は早朝及び夜間を避けた時間帯とすること等により、騒音の低減に努め、動物全般の生息環境の保全を図る。	工事にあたっては、「騒音・振動（別紙2）」写真2-7(1)～(2)（86～87ページ）に示すとおり、低騒音型の機械を用いた。また、原則として作業時間は早朝及び夜間を避けた時間帯として、早朝及び夜間の騒音の低減に努め、動物全般の生息環境の保全を図った。
・濁水対策 掘削工事に伴い発生する工事排水は、対象事業実施区域内に設置する沈砂池等によって、工事排水の沈殿処理を実施することで濁水の低減を図り、東京都の「建設工事等に伴い発生する汚水の基準」（浮遊物質（SS）120mg/L）以下にして放流することにより、濁水発生の低減に努め、水域を主な生息・生育域とする種の生息環境の保全を図る。	工事にあたっては、「水質汚濁（別紙3）」写真3-3～写真3-4（103ページ）に示すとおり、対象事業実施区域内に沈砂池及び濁水処理設備を設置し、濁水の低減を図り、根川排水口からの浮遊物質（SS）を1mg/L未満にして放流することで、濁水発生の低減に努め、水域を主な生息・生育域とする種の生息環境の保全を図った。

(2) 評価書の予測結果と事後調査の結果との比較検討

①生物

ア. 陸上動物相の変化の内容及びその程度

ア) 生息する動物種及び動物群集の変化の程度

(7) 哺乳類

対象事業実施区域内では哺乳類の利用はみられなかった。

周辺の河川敷に生息しているタヌキやイタチ等の中型以上の種及びアズマモグラやアカネズミ等の小型種では、事後調査においても確認されている。

したがって、事業実施区域から離れる種があるものの生息状況に大きな変化は生じないと評価書において予測した結果と同様である。

(4) 鳥類

評価書で確認された種は事後調査においても概ね同様の種が確認され、事後調査で新たに11種が確認されている。また、評価書及び事後調査で確認された鳥類の生息環境区分や渡り区分の構成は評価書と比べて大きな変化はかった。

したがって、事業実施区域から離れる種や一時利用頻度が低下する種があるものの生息状況に大きな変化は生じないと評価書において予測した結果と同様である。

(5) は虫類・両生類

評価書で確認された種は、事後調査においても概ね同様の種が確認され、事後調査で新たに6種が確認されている。

したがって、事業実施区域から離れる種があるものの生息状況に大きな変化は生じないと評価書において予測した結果と同様である。

(6) 昆虫類

対象事業実施区域内に生息していたアブラゼミやヤマトシジミ等や周辺の河川敷に生息する種のうち、バッタ類やコオロギ類等の鳴く虫も事後調査で確認されている。また、ほとんどの目区分で、科数、種数とも事後調査において増加しているが、目レベルの種数の構成に大きな変化はなかった。

したがって、アブラゼミやヤマトシジミ等は周辺の植栽樹林等を利用し、バッタ類やコオロギ類等の鳴く虫への影響はほとんど生じないと評価書において予測した結果と同様である。

イ) 注目すべき種の変化の内容及びその程度

(7) 哺乳類

注目すべき種（哺乳類）の変化の内容及びその程度は、本事業の実施による生息環境の直接改変はなく、本事業に伴う生息環境の消失・縮小・分断はなかった。

また、工事の施行中において、建設作業に伴い発生する騒音のレベルが高ま

った場所では、一時的に利用頻度が低下する可能性があったが、対象事業実施区域と本種の主な生息域である河川敷の間には道路及び河川堤防による緩衝区域が存在する。

事後調査においても、同様に確認されており、生息環境の消失・縮小・分断や建設作業による著しい影響はないと考えられる。

したがって、本事業の実施による影響はほとんどないと評価書において予測した結果と同様である。

(4) 鳥類

注目すべき種（鳥類）の変化の内容及びその程度は、本事業の実施による生息環境の直接改変はなく、本事業に伴う生息環境の消失・縮小はなかった。

陸域の生息環境については、建設作業に伴い発生する騒音のレベルが高まる場所では、一時的に利用頻度が低下する可能性があるが、対象事業実施区域と本種の主な生息域である河川敷の間には道路及び河川堤防による緩衝区域が存在する。

事後調査においては、樹林性のアオゲラや家屋・その他のヒメアマツバメ、コシアカツバメ及び猛禽類のミサゴやチョウゲンボウが事後調査で確認されなかったが、草地性のオオジュリンや猛禽類のツミが新たに確認されている。これらの種は、水辺（陸）、河川、樹林、草地等の環境に広くみられる種であり、確認の有無は偶発的なものであったと考えられ、生息環境の変化に起因するものではないと考えられる。

したがって、本事業の実施による影響はほとんどないと考えられる。

水域の生息環境については、浅川への工事排水の放流はなかった。工事排水の放流のあった根川では、工事排水を沈砂池等によって沈殿・濁水処理を実施し、東京都の「建設工事等に伴い発生する汚水の基準」(浮遊物質(SS)120mg/L)以下の1mg/L未満にして放流しており、著しい水質の変化はない。また、多摩川も同様に著しい水質の変化はない。

事後調査においては、生息環境が水辺の鳥類のうち、カイツブリ、コチドリ、イソシギが確認されなかったが、新たにバン、タシギ、クサシギ、イソシギが確認されている。

これらの種は、水辺（陸）、河川等の環境に広くみられる種であり、確認の有無は偶発的なものであったと考えられ、生息環境の変化に起因するものではないと考えられる。

したがって、本事業の実施による影響は小さいと考えられる。

以上のことから、本事業の実施による影響はほとんどないと評価書において予測した結果と同様である。

(ウ)は虫類・両生類

本事業の実施による生息環境の直接改変はなく、本事業に伴う生息環境の消失・縮小・分断はなかった。

浅川への工事排水の放流はなかった。工事排水の放流のあった根川では、工事排水を沈砂池等によって沈殿・濁水処理を実施し、東京都の「建設工事等に伴い発生する汚水の基準」（浮遊物質（SS）120mg/L）以下の1mg/L未満にして放流しており、著しい水質の変化はなかった。また、多摩川も同様に著しい水質の変化はなかった。

したがって、本事業の実施による影響はほとんどないと評価書において予測した結果と同様である。

(イ)昆虫類

本事業の実施による生息環境の直接改変はなく、本事業に伴う生息環境の消失・縮小はなかった。

事後調査においては、ウスバカマキリ、クマコオロギ、スナハラゴミムシ、ニセトックリゴミムシ、シロヘリツチカメムシ、ギンイチモンジセセリ、アオイトンボが確認されなかったが、新たに確認された注目種として、低茎草地を生息環境とするクルマバタ、樹林を生息環境とするシロスジカミキリ、エノキカイガラキジラミ、タイワンメダカカミキリ、ウラゴマダラシジミ、止水環境を生息環境とするヒメガムシほか、タケ・ササ類を生息環境とするハイイロヤハズカミキリ、開けた環境に生息するキンボシハネカクシの8種が挙げられる。

工事の施行中において、工事騒音のバッタ類やコオロギ類等の鳴く虫への影響が考えられたが、これらの種は基本的には夜行性であり、マツムシやクマズムシ、ヒゲジロスズなどの鳴く虫が事後調査でも確認されていることから、特に大きな繁殖阻害も起きなかったと考えられる。

したがって、本事業の実施による影響はほとんどないと評価書において予測した結果と同様である。

イ. 水生生物相の変化の内容及びその程度

ア) 生息（育）する水生生物種及び水生生物群集の変化の内容及びその程度

工事の施行中において、根川では、掘削工事に伴い発生する工事排水は、対象事業実施区域内に設置する沈砂池等によって、工事排水の沈殿処理を実施することで濁水の低減を図り、東京都の「建設工事等に伴い発生する汚水の基準」（浮遊物質（SS）120mg/L）以下である1mg/L未満にして放流しており、濁水の発生は抑えられていることから、著しい水質の変化はない。また、多摩川も同様に著しい水質の変化はない。

事後調査においては、大型水生植物、付着藻類、魚類、底生動物は評価書時点と同様の確認種または分類群が確認されており、著しい生息（育）環境の変

化はなかったと考えられる。

以上のことから、水生生物の生息（育）環境は、事後調査時とほぼ同様の生息環境が維持されることから、現存する水生生物への影響は小さいと評価書において予測した結果と同様である。

イ) 注目すべき種

(ア) 大型水生植物

評価書で確認されたカワチシャについては、本事業の実施による生育環境の直接改変はなく、本事業に伴う生息環境の消失・縮小はなかった。

また、工事の施行中において、多摩川への工事排水による著しい水質の変化はなかった。事後調査においても同様に確認されており、本事業の実施による影響はほとんどないと考えられる。

評価書で確認されたササバモ及びミクリ属の一種については、本事業の実施による生育環境の直接改変はなく、本事業に伴う生育環境の消失・縮小はなかった。工事排水の放流のあった根川では、工事排水を沈砂池等によって沈殿・濁水処理を実施し、東京都の「建設工事等に伴い発生する汚水の基準」（浮遊物質質量（SS）120mg/L）以下の1mg/L未満にして放流しており、著しい水質の変化はなかった。また、多摩川も同様に著しい水質の変化はなかった。事後調査においても同様に確認されており、本事業の実施による影響はほとんどないと考えられる。

以上のことから、本事業の実施による影響はほとんどないか小さいと評価書において予測した結果と同様である。

(イ) 付着藻類

本事業の実施による生息環境の直接改変はなく、本事業に伴う生息環境の消失・縮小はなかった

工事排水の放流のあった根川では、工事排水を沈砂池等によって沈殿・濁水処理を実施し、東京都の「建設工事等に伴い発生する汚水の基準」（浮遊物質質量（SS）120mg/L）以下の1mg/L未満にして放流しており、著しい水質の変化はなかった。また、多摩川も同様に著しい水質の変化はなかった。

評価書では注目される種の確認はなかった。注目される種としてタンスイベニマダラが事後調査において新たに確認されている。

したがって、本事業の実施による影響は小さいと評価書において予測した結果と同様である。

(ウ) 魚類

本事業の実施による生息環境の直接改変はなく、本事業に伴う生息環境の消失・縮小はなかった。

工事排水の放流のあった根川では、工事排水を沈砂池等によって沈殿・濁水処理を実施し、東京都の「建設工事等に伴い発生する汚水の基準」（浮遊物質質量

(SS) 120mg/L) 以下の1mg/L未満にして放流しており、著しい水質の変化はなかった。また、多摩川も同様に著しい水質の変化はなかった。

評価書で確認されたアブラハヤ、カマツカ、ニゴイ、ドジョウ、シマドジョウ、ギバチ、ナマズ、メダカ南日本集団は、事後調査においても同様に確認されている。また、事後調査では、外来種のオオクチバスやカムルチー、移入種のイトモロコといった種が新たに確認されており、生態系の変化がみられるものの本事業の実施による影響は小さいと考えられる。

したがって、本事業の実施による影響は小さいと評価書において予測した結果と同様である。

(I) 底生動物

本事業の実施による生息環境の直接改変はなく、本事業に伴う生息環境の消失・縮小はなかった。

工事の施行中において、多摩川への工事排水による著しい水質の変化はなかった。

評価書で確認されたスジエビ、ヤマサナエ、ホンサナエ、アオサナエ、オナガサナエ、コヤマトンボ、キベリマメゲンゴロウについては、事後調査においても同様に確認されており、本事業の実施による影響は小さいと考えられる。

本事業の実施による生息環境の直接改変はなく、本事業に伴う生息環境の消失・縮小はなかった

工事排水の放流のあった根川では、工事排水を沈砂池等によって沈殿・濁水処理を実施し、東京都の「建設工事等に伴い発生する汚水の基準」(浮遊物質(SS) 120mg/L) 以下の1mg/L未満にして放流しており、著しい水質の変化はなかった。また、多摩川も同様に著しい水質の変化はなかった。

評価書で確認されたモクズガニ、コオナガミズスマシについては、事後調査においても同様に確認されており、事後調査では新たに3種が多摩川の下流側で確認されていることから、本事業の実施による影響は小さいと考えられる。

以上のことから、本事業の実施による影響はほとんどないか小さいと評価書において予測した結果と同様である。

ウ. 生息（育）環境の変化の内容及びその程度

調査地域の主要な生息（育）環境は、多摩川及び浅川を横断的にみると、評価書時点と同様に対象事業実施区域に隣接した堤防法面から河川敷、河川流路となっている。堤防法面から河川敷では樹林、草地、止水といった環境があり、これらが動植物の生息（育）環境となっている。また、両河川の流路及び根川は流水環境となっている。

事業の実施により改変するのは基本的に対象事業実施区域内のみである。根川のうち、対象事業実施区域に隣接する三面張り区間の一部で橋梁工事を実施したが、生息環境に大きな変化はなく、下流河川では評価書時と同様の水生生

物が確認されており、著しい環境の変化はないと考えられる。

間接的影響として、工事の施行中に建設作業騒音が発生し、両河川の河川敷の対象事業実施区域付近では、哺乳類や鳥類の利用頻度が一時的に低下する可能性があったが、評価書時と同様の種が事後調査でも確認されており、著しい環境の変化はないと考えられる。

流水環境のうち、工事排水の放流のあった根川では、工事排水を沈砂池等によって沈殿・濁水処理を実施し、東京都の「建設工事等に伴い発生する汚水の基準」（浮遊物質（SS）120mg/L）以下の1mg/L未満にして放流しており、著しい水質の変化はなかった。また、多摩川も同様に著しい水質の変化はなかった。

以上のことから、本事業の実施による生息（育）環境への影響は小さいと評価書において予測した結果と同様である。

②生態系

ア. 陸水域生態系の変化の内容及びその程度

ア) 生態系の機能及び構造の変化の内容及びその程度

(7)環境類型区分

a. 樹林環境

樹林環境は、調査地域全体の約19%を占めている。評価書では調査地域全体の18%を占めており、調査地域全体における樹林環境の割合の変化は小さい。植生は、ハリエンジュ群落、次いでムクノキ-エノキ群集がその中心となっており、樹林性の動物の繁殖、採餌又は休息場としての機能を持っている。

事業により樹林は改変していないことから、影響はほとんどないと評価書において予測した結果と同様である。

b. 草地環境

草地環境は、調査地域全体の約34%を占めている。評価書では、調査地域全体の約31%を占めており、多摩川の植生遷移に加え、浅川における河川管理等により草地環境が増加している。植生はススキ群落がその中心となっているが、堤防法面のような管理を受けている場所ではチガヤ群落となっている。また、攪乱を受ける場所ではカワラヨモギ-カワラハハコ群落のような河原に特徴的な群落もみられる。当環境に生息（育）する動植物は多く、動物の繁殖、採餌、休息場としての機能を持つ。

事業により草地は改変していないことから、影響はほとんどないと評価書において予測した結果と同様である。

c. 人工的環境

人工的環境は、調査地域全体の約40%を占め、建造物、公園・グラウンド、人工裸地、道路、植栽樹林群等が含まれる。数は少ないが、自生する植物種や

当環境を利用する動物がいる。

対象事業実施区域内を利用する動植物は、工事の施行中はほとんど利用しなくなっているが、これらの種は適応力が高く、供用時に環境が安定するにつれて、再利用すると考えられる。

したがって、本事業の実施による影響は小さいと評価書において予測した結果と同様である。

d. 止水環境

止水環境は、多摩川河川敷のワンド状の池で、開放水面及びヒメガマ群落より構成され、調査地域全体の約2%を占めている。調査地域には、ほかに止水環境がほとんどないことを反映し、ニホンアカガエルやアズマヒキガエル、止水性トンボ類等の繁殖環境としての機能が強く、特徴的な環境といえる。

事業により止水環境は改変していないことから、影響はほとんどないと評価書において予測した結果と同様である。

e. 流水環境

流水環境は、根川、浅川、多摩川の流路で、調査地域全体の約5%を占めている。浅川及び多摩川における調査範囲では、河川の中流域に特徴的な魚類や底生動物がみられる。また、これらを捕食するカワセミやサギ類等の採餌や休息場としての機能を持つ。

流水環境は、根川のうち、対象事業実施区域に隣接する三面張り区間の一部で橋梁工事を実施したが、それ以外、事業による改変を受けていない。また、根川においては掘削工事に伴い発生する工事排水は、対象事業実施区域内に設置する沈砂池等によって、工事排水の沈殿処理を実施することで濁水の低減を図り、東京都の「建設工事等に伴い発生する汚水の基準」（浮遊物質（SS）120mg/L）以下の1mg/L未満にして放流しており、著しい水質の変化はない。

したがって、本事業の実施による影響は小さいと評価書において予測した結果と同様である。

イ) 注目される種及び群集の変化の内容及びその程度

(7) 上位性（イタチ、チョウゲンボウ、アオサギ）

評価書で確認されたチョウゲンボウが事後調査では確認されなかった。チョウゲンボウに代わる上位性の種としてツミが挙げられる。

イタチ及びツミは食物連鎖において上位に位置し、調査地域内の陸域及び水辺を採餌場として利用している。本事業の実施によるこれらの生息環境の改変はないため、餌資源となる動物の減少はない。間接的影響として、工事の施行中に建設作業騒音が発生し、一時的に対象事業実施区域付近での利用頻度が低下していた可能性があるが、工事の完了後は徐々に現況と同程度に生息状況が回復すると考えられる。

事後調査において、ツミにおいては採餌行動が確認されている。イタチは評価書と同様に確認されており、本事業の実施による影響は小さいと考えられる。

アオサギも食物連鎖において上位に位置し、調査地域内の主に流水環境（河川）を採餌場として利用している。流水環境（河川）のうち、対象事業実施区域に隣接する根川の三面張り区間の一部で橋梁工事を実施したが、それ以外、事業による改変を受けていない。間接的影響として、根川において掘削工事に伴い発生する工事排水は、対象事業実施区域内に設置する沈砂池等によって、沈殿処理を実施することで濁水の低減を図り、東京都の「建設工事等に伴い発生する汚水の基準」（浮遊物質（SS）120mg/L）以下の1mg/L未満にして放流しており、著しい水質の変化はなかった。また、多摩川及び浅川では著しい水質の変化がなかったことから、餌資源となる水生生物の減少はないと考えられる。

事後調査において、評価書と同様にアオサギは確認されており、本事業の実施による影響は小さいと考えられる。

以上のことから、上位性の観点から食物連鎖に変化は生じないと評価書において予測した結果と同様である。

a. 典型性（ムクノキ-エノキ群集、ススキ群落、キジ、ヤマトタマムシ、オイカワ、シロタニガワカゲロウ）

評価書で確認されたヤマトタマムシが事後調査では確認されなかった。ヤマトタマムシに代わる典型性の種としてカナブンが挙げられる。

ムクノキ-エノキ群集（落葉広葉樹林）、ススキ群落は、調査地域に比較的広く分布している。

キジは調査範囲を広く占めるススキ群落を主体とした草地を主な生息場所とする。カナブンは調査範囲に広く点在する落葉広葉樹林を主な生息場所とする。本事業の実施によるこれらの環境の改変はなく、評価書と同様に確認されていることから、影響は小さいと考えられる。

オイカワ及びシロタニガワカゲロウは多摩川、浅川、根川の瀬を中心に広く生息する。根川のうち、対象事業実施区域に隣接する三面張り区間の一部を除き、本事業の実施による生息環境の改変はない。間接的影響として、根川においては掘削工事に伴い発生する工事排水を、対象事業実施区域内に設置する沈砂池等によって、沈殿処理を実施することで濁水の低減を図り、東京都の「建設工事等に伴い発生する汚水の基準」（浮遊物質（SS）120mg/L）以下の1mg/Lにして放流しており、著しい水質の変化はなかった。また、多摩川及び浅川では著しい水質の変化はなく評価書と同様に確認されていることから、これらの種の生息状況に変化はなかったと考えられる。

以上のことから、典型性の観点から食物連鎖に変化は生じないと評価書において予測した結果と同様である。